

清末小説から 147

2022.10.1

- 呉禱漢訳ズーダーマン『賣国奴』(上)——登張竹風訳『賣国奴』……………荒井由美 1
呉禱漢訳「大復讐」——押川春浪「復讐」……………沢本香子12
包天笑漢訳ヴェルヌ『碧海情波記』——森田思軒訳「大東号航海日記」……………樽本照雄19
アンデルセン最初の漢訳「裸の王様」——台湾版「某侯好衣」……………沢本郁馬29
陳景韓漢訳ル・キュー「虚無党奇話」——松居松葉『虚無党奇談』……………神田一三34
お知らせ12 / 清末小説から52

★『清末民初小説目録 第14版』を公開しています。研究者用です。研究目的であれば自由にダウンロード(無料)して使用することができます。8229ページになるとは思いもしません

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

呉禱漢訳ズーダーマン『賣国奴』(上) ——登張竹風訳『賣国奴』

荒井由美

呉禱漢訳『賣国奴』の原作をたどっていくとズーダーマン『猫橋』になる。ヘルマン・ズーダーマン(HERMANN SUDERMANN、1857-1928)はドイツの劇作家、小説家。原作名は“DER KATZENSTEG”(1888又1890)だ。

日本ではドイツ語原作から登張竹風が日訳し

て『賣国奴』とした。清末の呉禱は竹風日記を底本にして漢訳題名も同じく『賣国奴』だ。この翻訳2種類をめぐっていくつかの未解決問題がある。

そもそも最初の漢訳には呉禱の名前がなかった。さらには底本にした日訳者竹風の名前も初期の段階で記述されていない。明示されるのには時間差がある。これに初出掲載誌『繡像小説』の発行遅延がからんでくる。今でも言及されることはほとんどない事柄だ。おまけに単行本の後刷りには初版刊年の記述間違いが見られる。複雑な事情が重なっていることさえ意識にのぼりにくい。今にいたるまでいくつかの謎が放置されたままだ。

漢訳の検討をはじめの前に作品が発表された経緯を整理する。事実の認識に混乱があるからだ。それを解決してからののはなしになる。

1 呉禱漢訳『賣国奴』の公表経過

呉禱漢訳『賣国奴』は清朝末期から民国初期

にかけて版を重ねて刊行された。その過程を述べる。

作品公開の大きな流れは次のとおり。最初は商務印書館が刊行する雑誌『繡像小説』が連載した。そのあと同じ版元の商務印書館が出版する「説部叢書」元版と初集に収録される。

初出雑誌から単行本になる。清末民初において普通に見ることのできる公表経過だ。雑誌掲載で終わる作品が多い。そういう状況にあって単行本で発行されたのは読者の好評を博したからだ。

それぞれについて解説する。

『繡像小説』連載

德国蘇德蒙原著「實國奴」16回は『繡像小説』第31-33、37-48期(刊年不記)に連載された。

雑誌初出では目次に「德国蘇德蒙原著」とあるのみ。本文にも登張竹風と吳構の名前は見えない。氏名不明の人物がドイツ語から漢訳したような印象を与えている。漢訳では底本にはない回目16回分を新しく付加した。

もうひとつ。掲載誌である『繡像小説』第31-48期には刊年の記載がもともと欠けている。それに気づいている研究者は多くない。

『繡像小説』は半月刊である。創刊は「癸卯(光緒二十九年)五月初一日(1903.5.27)」だと目次に記述した。当時の新聞広告などで出版記録を確認すればそれがほぼ事実であることが理解できる。

創刊号から第12期までは目次に発行年月日が記された。しかしその記載どおりに出版されたわけではない。実際は早くも第3期あたりから刊行が遅延しはじめた。第12期の記載は「癸卯(1903)九月十五日」だが実際に発行されたのは翌年「甲辰(1904)正月末」になった。発行遅延が理由なのだろう、第13期より刊行月日を掲載しなくなる。

ところが刊年不記と発行遅延の事実は学界において広く認知されるにはいたっていない。

それに大きな負の影響力を及ぼしたのが清末文学研究の権威阿英だ。彼は『繡像小説』全72期は半月刊が維持されたと断言したのだった(1958)*1。

研究者の多くが阿英説を受け入れた。あくまでも半月刊が守られたと考えて(その事実はないにもかかわらず)最終の第72期は「丙午三月十五日(1906.4.8)」に発行されたと信じた。阿英が説明したとおり、奇しくも該誌主編李伯元の死去が「丙午」だ。伯元が死亡した旧暦「三月十四日」と雑誌の終刊(推定)「丙午三月十五日」が偶然に一致する。研究者は阿英説を疑わなかった。

それ以降、各種資料、目録、解説文などは刊年不記の実態を無意識に隠蔽した。阿英の記述を反復したのである。学界においては1980年



『繡像小説』第31期 表紙 目次 本文

代までこの誤った説明が定説となっていた。

それでもある目録は記号を使用して発行年月日がないことを明記する*2。

具体的には次のとおり。該誌の第12期は「1903年11月3日(癸卯九月十五日)」だが第13期は「1903年11月〔癸卯十月〕」(1105頁)と書き分けた。()と〔 〕を弁別して精細な編集姿勢を示したのである。ただし目立たない措置だから利用者はそれに気づかない。表面上は厳密な処理ではあった。しかし示した年月はもとから根拠のない推測年月だ。間違っているから定説を打破することにはつながらない。いっそのこと記入せず空白にしておくほうがよかった。

その阿英説を正面から否定したのが張純(1985)*3だ。『繡像小説』の発行が遅延していた事実を提起した。新しい発見がある優れた論文だ。ただし学界は彼の発言を完全に無視した。その後もあいかわらず阿英説を流布し続けたのである。

発行年月日について正確に把握できないその結果はどうなったか。事実ではない刊年を信じ込んだから『賣国奴』にも影響が及んでいる。

基準となるのは竹風日訳『賣国奴』の刊年「明治37(1904)年9月15日(旧暦八月六日)」である。

ここではいくつかの問題点を指摘しておく。重複するのはご了承いただきたい。

「賣国奴」第1回を掲載した『繡像小説』第31期は「甲辰七月初一日(1904.8.11)」とする。連載終了の第48期は「乙巳三月十五日(1905.4.19)」という。いずれも雑誌には記載のない偽りの年月日だ。

必然的に『繡像小説』の掲載(1904.8.11)と底本になった竹風日訳『賣国奴』刊行(1904.9.15)の時間関係が逆転する。日訳より前に漢訳が約1ヵ月も先行して公表されたという認識が出てくる。きわめて異様だ(誤解1)。前提が誤っていることが理解できていない。

さらに、その『繡像小説』連載(1904)よりももっと先行して呉構漢訳単行本(1903)が出版されたという。通常は雑誌連載の後に単行本化されるという過程を経る。その前後が入れ替わっているからおかしい(誤解2)。

最後に「説部叢書」所収の『賣国奴』が問題だ。後刷り本奥付の記載(1903)は竹風日訳(1904)よりも前に刊行されたことを示す。漢訳単行本が日訳底本に先行する。誰しもが奇妙だと感じる(誤解3)。

以上の諸説を箇条書きにしてまとめる。作品の公表時期をめぐる誤解である。竹風日訳および呉構漢訳の雑誌掲載と単行本、この3者の関係だ。

誤解1：『繡像小説』連載は底本となった竹風日訳よりも以前だ。

誤解2：呉構漢訳単行本は『繡像小説』連載よりも先に刊行された。

誤解3：呉構漢訳単行本は竹風日訳に先んじて出版された。

以上の3点はいずれも出版時期に関連している。漢訳の公表が底本の日訳よりも早いという信じられない認識になっている。

誤って考えられたのには理由がある。清末民初に出た各種刊行物の刊年記載が原因だ。疑問が提出されているにもかかわらずいまだに回答がなされていない。言い換えて訂正されていないというのが適切だろう。それについての詳細を次に述べる。

漢訳公表の時間問題は些細なことだと思う人がいるかもしれない。たとえばある中国人はネット上に「日本人写点東西大驚小怪的(日本人の書くものは、なんでもない事に大騒ぎする)」(2021.9.16)と書き込んだ。その「なんでもない事」に気づかず自国の文学史上で一大冤罪事件にしたことを理解する知識と能力が不足している。残念なことだった。

学術上の誤解は小さなことでも正されなければならぬと筆者は考える。

竹風単行本と『繡像小説』の掲載——発行遅延説

問題のひとつは竹風日記の刊行と『繡像小説』に掲載された呉樞漢訳の時間的關係だ。何気なく見ると漢訳の方が底本よりも先に公表されている(誤解1)。普通そういうことはない。

あらためて解説する。

前述のように『繡像小説』の刊年が記されな

くなった事実がある。しかし以前はあくまでも推定の発行年月日で使用されるのが常識だった。それを根拠に考えると異常な情況が存在すると誤認する。

問題解決の手がかりは『繡像小説』の発行が遅れていたという事実だ。

「賣国奴」を掲載した該誌第31期が実際に刊行されたのは「乙巳(1905)二月」である(表:『繡像小説』掲載の「賣国奴」を掲げる)。

年月日	繡像小説	繡像小説 実際	賣国奴	その他
癸卯1903十月				×呉樞『賣国奴』説部叢書元版十月←誤記
甲辰1904七月初一日	第31期推定			
七月十五日	第32期推定			
八月初一日	第33期推定			登張竹風『賣国奴』1904.9.15(八月六日)
十月初一日	第37期推定			
十月十五日	第38期推定			
十一月初一日	第39期推定			
十一月十五日	第40期推定			
十二月初一日	第41期推定			
十二月十五日	第42期推定			
乙巳1905正月初一日	第43期推定			
正月十五日	第44期推定			
二月初一日	第45期推定	第31期乙巳1905二月	第1回	出版広告の「続出書」に『賣国奴』あり
二月十五日	第46期推定			
三月初一日	第47期推定	第32期 三月	第2回	
三月十五日	第48期推定			
四月		第33期 四月	第3回	
六月		第37期 六月	第4回	
〃		第38期 六月	第5回	
七月		第39期 七月	第6回	

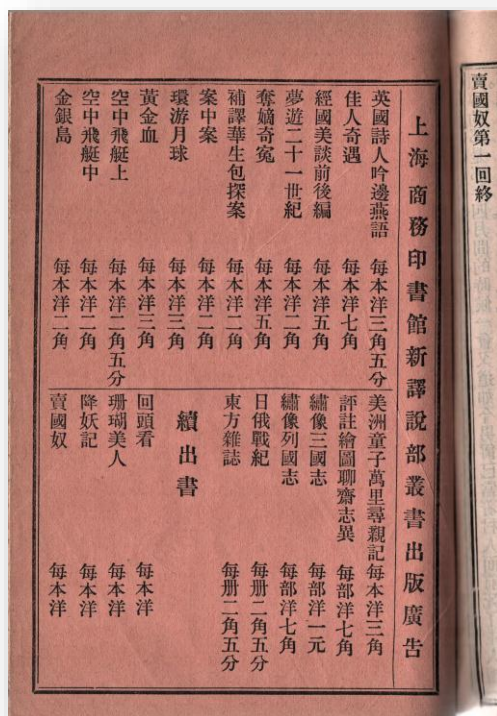
〃		第40期	七月	第7回	
八月		第41期	八月	第8回	
〃		第42期	八月	第9回	
〃			〃	第10回	
九月		第43期	九月	第11回	
十月		第44期	十月	第12回	
十一月		第45期	十一月	第13回	(吳禱)『賣国奴』説部叢書元版十一月首版
〃		第46期	十一月	第14回	
十二月		第47期	十二月	第15回	
〃		第48期	十二月	第16回	

従来、理由なく考えられてきた「甲辰（1904）七月初一日」よりも約半年の発行遅延が生じている。複数新聞の刊行広告などを資料にして推断しているから事実をほぼ反映しているだろう。ついでに言えば、陳大康も同じ手法を使い推定年月を提示する。

この時間差約六ヵ月を見れば吳禱が竹風日記にもとづいて漢訳する時間はあったことになる。日記があつて吳禱が漢訳した。当たり前の経緯だ。

なお『繡像小説』の該期には「上海商務印書館新訳説部叢書出版広告」が掲載された。その「続出書」に『賣国奴』が連なっている事実注目いただきたい。雑誌連載開始時に単行本として刊行される予定がすでに決まっていたということだ。それは同時に「賣国奴」が『繡像小説』に掲載された時点で単行本はまだ刊行されていない証拠のひとつとなる。

雑誌連載を経て単行本になるのが基本だ。ただし『賣国奴』のばあいには『繡像小説』の連載が完了する少し前に単行本が出版されたという違いはある。つけ加えれば『繡像小説』の組版をそのまま「説部叢書」に使用した*4。組版がすでに存在する。単行本化されるのに時間がかからなかったのも理解できる。



『繡像小説』第31期広告

商務版「説部叢書」の『賣国奴』1——元版系

商務印書館の「説部叢書」は刊行時期により先の①元版系と後刷りの②初集本系がある。

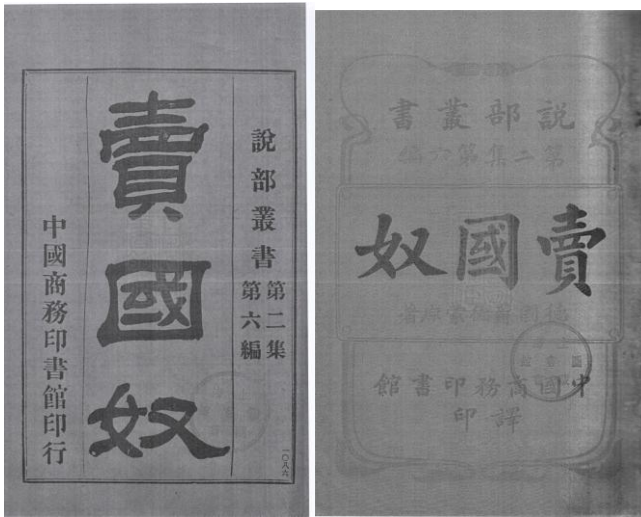
「説部叢書」収録『賣国奴』の問題は刊年記述に一部不具合、すなわち誤記があることだ。

順番に記述する。

①元版「説部叢書」の第二集第六編（初集と区別するために集編番号は漢数字を使用）

元版系は筆者の知る限り初版、再版、三版の3種が出版された。

(a) 「首版」がある。初版と同じ意味だ。表紙はタンポポ文様、德国蘇德蒙原著と記される。角書「軍事小説」はない。山陰金為鶴笙父「賣國奴題詞」、本文の角書は「説部叢書」。奥付の編訳者は中国商務印書館編訳所となっている。刊年は光緒三十一年(1905)十一月首版(上海図書館所蔵)。



細部は初版と同じ。角書なし。奥付は「編訳者：中国商務印書館編訳所、総發行所：上海・中国商務印書館、光緒三十一年(1905)十一月首版/光緒三十二年(1906)三月再版」だ。



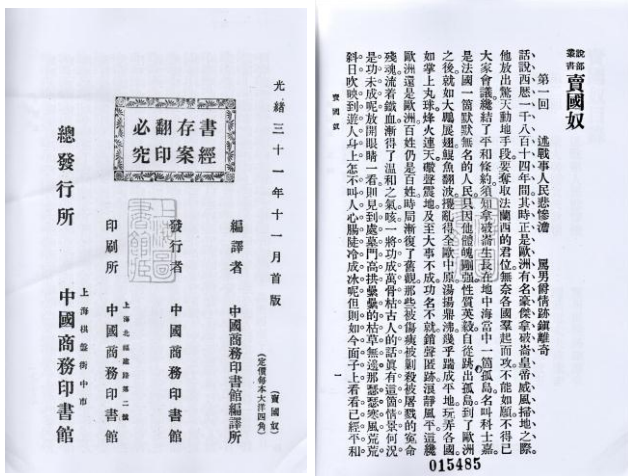
「首版」についての発行年月記載を再版でもくり返している。ここは重要だから下線をほどこした(下線筆者。以下同じ)。

「説部叢書」が訳者を「商務印書館編訳所」とするのは意味があると中村忠行は書いた。買い取り原稿、あるいは商務印書館編訳所の所員であることを示しているという。そうかもしれない。

ただし『繡像小説』掲載の別の漢訳では呉構の名前を出している。また「説部叢書」でも同様だ。ゆえに『賣國奴』の「説部叢書」元版(aとb)においてのみ呉構ではなく商務印書館編訳所とするのは不思議に思う。次の元版系三版(c)では一転して呉構名を明記するからなおのことだ。表記が一貫していない。理由は不明。

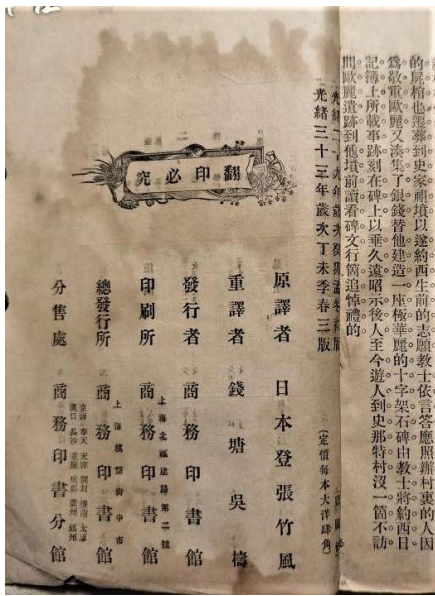
(c) 三版がある。付建舟が写真を掲載する(461頁)*6。その表紙写真を見ると初版、再版と同様にタンポポ文様だ。また角書がないことも変わらない。

ただし以前とは大きく様変わりした箇所がある。表紙の德国蘇德蒙原著が消滅している。付



初版には角書と呉構の名前が見えない。また登張竹風についても表示はないことに注目する。漢訳単行本では初版本の刊年が基準になる。

(b) 再版がある。中村忠行が論文で紹介した*5。



三版奥付 孔夫子旧书网は表紙なし

建舟も説明して「未署原著者」とする。さらに奥付を「原訳者：日本登張竹風、重訳者：錢塘吳構」と変更した。以前にはなかった竹風の名前を出したのが新しい。また中国商務印書館編訳所のかわりに、ここではじめて吳構が登場する。総發行所も「中国」をつけない商務印書館である。

奇怪なのは奥付に刊年を示して「光緒二十九年（1903）歲次癸卯孟冬初版／光緒三十三年（1907）歲次丁未季春三版」と記述した前半部分だ。

すでに首版（初版）で「光緒三十一年（1905）十一月」を確認している。再版も同じだ。それにもかかわらず三版においてなぜだか初版刊年を下線部で示したように「光緒二十九年（1903）歲次癸卯孟冬初版」と変更した。一致しない。光緒三十一年であるところを二十九年とし、旧曆十一月を十月（孟冬）へと書き換えたのだ。これでは刊年が実際よりも二年も早まる。初版が実在するのだからこの三版の年月は誤りとせざるをえない。

三版のこの表示が誤解の2と3を発生させる原因のひとつである。漢訳単行本發行が1903

年ということになる。そうすると『繡像小説』連載（実際は1905年）および底本の竹風日訳（1904年）よりも先行する。これには誰も驚くはずだ。

陳大康のばあい

大型清末小説年表がある。陳大康『中国近代小説編年史』全6冊（2014）*7だ。実物の雑誌、単行本にもとづき編集したという。刊年について月日まで記載して詳細だ。出版広告を収録して史料的価値が高い。規模の大きさからいっても空前といっている。

その年表から吳構漢訳『賣国奴』の関係部分を抜き出し下に示す（カッコ内を補足した）。

[編年②662] （光緒二十九年^㉞（1903）十月）

標“軍事小説^㉞”、16回、原訳者：日本登張竹風、重訳者：錢塘^㉞吳構、上海^㉞商務印書館、《説部叢書》初集^㉞第十六編と誤る [大康18-828]未収録

[編年②820] （『繡像小説』第31期、光緒三十一年（1905）二月）開始連載、共16回、署“德国蘇德蒙原著”、商務印書館翌年^㉞（1906）出版此單行本時署“原訳者：日本登張竹風；重訳者：錢塘^㉞吳構”

[編年③920]（首版、光緒三十一年（1905）十一月）未収録 [大康18-848]未収録

[編年③976]（光緒三十二年（1906）三月）再版、説部叢書不記 [大康18-854]同左。三月但日期不詳、説部叢書不記

[編年③1227]（光緒三十三年（1907）三月）三版、説部叢書不記 [大康18-873]同左。三月但日期不詳、説部叢書不記

上の年表を解説すれば次のようになる。

吳構漢訳『賣国奴』は1903年に初版が出た。『繡像小説』連載後に再版が1906年に、三版が1907年に刊行された。

一見するとどこにも不審な個所はない。しか

し「説部叢書」の刊行経過を知る人ならば瞬時に見破るだろう。首版(初版)の位置(【編年②662】)が正しくない。

それぞれについて確認する。

【編年②662】で初版の出版年月を「光緒二十九年^ア(1903)十月」にした。だがそれが実在するとは寡聞にして知らない。あるというのなら後刷りではない「光緒二十九年十月」初版本そのものを提示すべきだ。

陳大康がそう誤認した原因を推量すれば、初版を把握しなかったからだ。三版の間違った奥付表記を信じた。そうとしか考えられない。付随して再版の把握も問題になる。

また初版には角書「軍事小説」はない。明記するのは後刷りの初集本からだ。さらに登張竹風と呉禱の名前は掲げられていないのが事実である。ないものを掲げた、というよりも気づかなかったのだろう。初版に実在しないものを記述するのも三版の奥付と初集本にもとづいたとわかる。

同じく初版にはある「德国蘇德蒙原著」を上記に記入していない。これも三版によっている証拠になる。

「説部叢書初集^ア第十六編」で「ママ」とした箇所は基本的知識に問題がある。清末の「説部叢書」は元版第二集第六編であって後刷りの初集第16編とは区別する必要がある。それを混同しているという意味。誤った「説部叢書」の表記を陳大康が後の自著で(説明せずに)削除したことも付け加える。

【編年②820】の『繡像小説』第31期刊行を推定して「光緒三十一年(1905)二月」とするのは正しい。しかし初版を1903年刊にしたから雑誌連載と逆転する。「翌年^ア(1906)出版此単行本」はどの版を指すのか不明確だ。初版を把握していないから間違った記述にならざるをえない。

【編年③920】の「未収録」はあるべき「光緒三十一年十一月首版」を取り落としたことを示

す。ここから陳大康が初版を見ていないことがわかる。入手しているのであれば記述しない理由を明らかにする必要がある。

【編年③976】の再版表示を見ると当然のように疑問が生じる。陳大康はそこで「再版(光緒三十二年(1906)三月)」を提出した。ここは正しい。ゆえに再版奥付にある「光緒三十一年十一月首版／光緒三十二年三月再版」を見てははずだ。しかしこの前半下線部に記してある「光緒三十一年十一月首版」は抹殺した。なぜなのか疑義が残る。三版の誤った記録を全面的に信用して再版の正しい方は考慮しなかった。不適切である。結局のところ『賣国奴』初版を見ていないらしいから判断の根拠が不明になったとくり返す。

「説部叢書不記」と注記したのは文字どおりの意味。初版を「初集^ア第十六編」と記述した。再版、三版も同様だからその表記は不必要だと判断したと思われる。もともと誤解しているからそれがなくてもかまわない。

【編年③1227】三版は奥付後半の「光緒三十三年(1907)三月」のみを提出した。三版にある正しくない前半の初版刊年を信じて【編年②662】に配置した。実在しない1903年初版をあたかも見ているように書いたのはよくない。

陳大康は元版系三版の誤記を信用した。理由は不明だ。ゆえに再版の正しい奥付はどうして無視したのかという質問にもどる。基準を持たないから迷走したとしかいいようがない。

以上を見てわかることがある。『賣国奴』元版系初版が試金石となり後刷りの記述間違いをあぶり出すという事実だ。

商務印書館「説部叢書」の後刷り初集本が初版について異なる刊年を記すことがある^{*8}。その記述を信用するのは危険だと以前から言っている。初版はやはり初版を見なければ確定できないと知るべきだ。

元版系「説部叢書」は原著者、日訳者、漢訳者の表記を出し入れしながら、光緒三十一

(1905)年から三十三(1907)年まで毎年重版を行なっている。読者から歓迎された証拠である。

商務版「説部叢書」の『賣国奴』2——初集本

次が後刷りの初集本だ。中華民国になって刊行された。「説部叢書」元版系三版の誤った記述はこの初集本に引き継がれた。ゆえに誤解はより強固になった。

②初集本「説部叢書」の初集第16編(元版と区別するために編番号はアラビア数字を使用)

「説部叢書」元版全十集一百編は名称を変更して初集全100編になった。表紙も元版のタンポポ文様から初集本はリボン文様が変わる。以下、2集100編、第3集100編(統一表紙ではなくなった)、第4集22編となって終了した。

初集本の『賣国奴』は原作者の「德国蘇徳蒙」は表示しない。「原訳者：日本登張竹風、重訳者：杭県呉構」とある。

こちらが元版系三版と違うところは角書に「軍事小説」をつけたことだ。また以前の「錢塘呉構」は「杭県呉構」になる。錢塘から杭県に改称されたことをふまえる。

筆者のしている初集本2種の刊年を示す。

(1914) 四月再版(実藤文庫)

ここでも初版の刊年を「癸卯年(1903)十月」と誤記している。元版系三版の誤りを引き継いだ。ゆえに誤解3が発生する。誤記によって発生する誤解だから整合性がないのも当然である(刊行一覧を参照)。

中村忠行ほかのばあい

中村忠行は元版と初集本の複数版本を見ている。それらを総合して漢訳と日本語底本の時間関係を説明した。いくつか引用する。

どう見ても華訳の方が竹風訳より早く出版されているのだ。3頁⁹

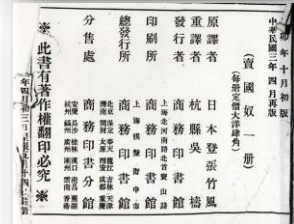
説部叢書の後刷である初集本は、奥附に「光緒癸卯(29)初版/民国三年四月再版」……これは、同書館の原簿に基き書改めたものであろう。而して、その訳出が光緒二十九年にあったということは、上記説部叢書本の上梓以前にも、別行の一本が出版されていたことを示す。3-4頁

そうしてその初印は、初集本の奥附にある様に、光緒二十九年であつたに違いない。4頁

かうした出版物の中には、例へば上記『賣国奴』の如く、原典たる登張竹風訳より華訳の方が先に出版されるといふ、常識では一寸考へられない様な珍本も存在するのである。28頁¹⁰

中村は元版系初版を見えていなかった。そのために初集本にある「癸卯年(1903)十月初版」刊行に惑わされたと思われる。

1903年に商務印書館は日本の金港堂と合弁会社になった。そういう特別な背景がある。呉構漢訳『賣国奴』の刊行が竹風日訳よりも先行した(ように見える)理由を中村は両社合弁の事実にかからめて考えた。合弁問題に詳しくは



癸卯年(1903)十月初版/中華民國二年(1913)十二月版
癸卯年(1903)十月初版/中華民國三年

中村は金港堂が竹風日訳を事前に商務印書館に渡したと示唆したのだ。しかし刊年間違いだからその説明は成立しない。

もうひとつは別人の説明だ。

初集本の奥付記載にもとづき初版が「癸卯(1903)十月」だと信じて『繡像小説』掲載との関係も奇怪なことになる。

前述のとおり「賣国奴」を掲載した『繡像小説』第31期の刊年は「甲辰(1904)七月初一日」だと思込まれていた。

これに存在しない初版「癸卯(1903)十月」を重ねる人もいる。誤解2を引き起こす理由である。漢訳単行本が1903年刊でそれ以後の1904年に『繡像小説』掲載となった。それをそのまま見て『賣国奴』は『繡像小説』連載前に単行本が出ており当時の刊行物として珍しいと述べた*11。『賣国奴』についていえばその説明も成り立たない。

まとめる。『繡像小説』は発行が遅延していた。また単行本の刊年を「癸卯年(1903)十月初版」と記載するのは正しくない。そこを把握すればすべての謎は解ける。

2 中村忠行が登張竹風を指摘する

ズーデルマン『猫橋』が竹風日訳『賣国奴』になり呉構漢訳『賣国奴』に結びつく。今では周知の事実だ。しかし最初から判明していたわけではない。さかのぼっていけば単純なことではないことがわかる。だいいち呉構漢訳『賣国奴』に言及する文献が少ない。

阿英編『晚清小説史』(1937)*12には「徳国有呉構訳蘇德曼賣国奴(繡像小説)」(281頁/185頁)とあるのみ。原作者表記は「蘇德蒙」だ。それを阿英は「蘇德曼」と書いた。実物のままではなく現代漢語の表記を採用した。『繡像小説』掲載だから呉構と竹風はもともと記載されない。それを表示したのは後刷りから呉構のみを採取したからだ。竹風は無視した。ここには刊年もなければ後の「説部叢書」もな

い。概説だから詳細を求めてもむだなことだ。

中華人民共和国になってから刊行された阿英目録(1954/1957)の記載を見る。

[阿英160] 賣国奴 徳 蘇德曼著。呉構訳。
光緒三十一年(一九〇五) 商務印書館刊。

阿英目録は翻訳作品を収録したのが画期的だった。ただし原作についての注釈はつけない。それが彼の編集方針だ。

こちら「蘇德曼」と書く。後の「説部叢書」元版系初版の刊年を提示したのが以前とは異なる。

刊年を「三十一年(一九〇五)」とするから初版を見ていることがわかる。ここでも初版に存在しない呉構訳が出てくる。後刷りの表示を混入させた。ならば登張竹風の名前も出すべきだがこちらでも黙殺した。

阿英目録の特徴のひとつは雑誌掲載の作品も収録したことだ。残念ながら『賣国奴』については『繡像小説』が初出であることは示していない。前著『晚清小説史』と比較していくつかの不備があるということだ。

呉構漢訳『賣国奴』の底本が竹風日訳であることを指摘した研究者は中村忠行である。関連する箇所をいくつか引用する。

[中村50-82] 登張竹風訳の『賣国奴』(原作は、ズーデルマンの『猫橋』KATZEN STEG⁷⁷⁾)が呉構によつて重訳せられ(割注:光緒廿九年商務印書館発行の『説部叢書』の一)たり*13

[中村51-88] 中には呉構訳の『賣国奴』(割注:登張竹風訳『賣国奴』すなはちズーデルマンの『猫橋』)の様に、かなりの成功を収めてあるものもある*14。

[中村53-40] ズーデルマン『猫橋』。登張竹風訳による。同(光緒)廿九年*15。

[中村64-81] 『賣国奴』(ズーデルマン原

作・登張竹風訳『賣国奴』一九〇五年*16。

中村は『繡像小説』、「説部叢書」元版、初集本の記述を総合して説明した。

『繡像小説』の写真を所有していたという。竹内好の所蔵本を作品別に写真撮影したと聞いたことがある。当時、『繡像小説』全72冊の原本を所有していたのは澤田瑞穂だがそれとは別だ。

刊年に「光緒廿九年（1903）」と「一九〇五年」を混在させている。決め手になる元版系

初版を把握していなかったとわかる。

德国（ドイツ）蘇德蒙（ズーダーマン）原著、原訳者：日本登張竹風、重訳者：錢塘吳構などから竹風日訳『賣国奴』が導き出されたと思う。竹風訳の書名『賣国奴』を吳構がそのまま使用したからわかりやすい。

それにしても中村の指摘は1950年である。時期的に見てきわめて早い言及というべきだ。それ以後の論文は中村の指摘を踏襲することが普通になった。 ㊦

刊行一覧 黄色は誤記を示す

	角書 軍事小説	原作者 蘇德蒙	日訳者 登張竹風	漢訳者	刊年 1	刊年 2
繡像小説	×	○	×	×	×	
元版第二集第六編						
初版	×	○	×	中国商務印書館編訳所	光緒三十一年十一月首版	
再版	×	○	×	中国商務印書館編訳所	光緒三十一年十一月首版	光緒三十二年三月再版
三版	×	×	○	錢塘吳構	光緒二十九年十月初版	光緒三十三年三月三版
初集第16編						
版	○	×	○	杭県吳構	癸卯（1903）十月初版	民国二年十二月版
再版	○	×	○	杭県吳構	癸卯（1903）十月初版	民国三年四月再版

【注】

- 1) 阿英『晚清文藝報刊述略』上海・古典文学出版社1958.3/中華書局編輯所編輯、北京・中華書局1959.8上海第一次印刷。「半月刊。李伯元主編。始刊于光緒癸卯（一九〇三）年五月，至丙午（一九〇六），因伯元逝世休刊，共行七十二期」17頁
- 2) 上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』（2）1900-03年分 上海人民出版社1979.10
- 3) 張純「關於清末《繡像小説》半月刊的終刊時間」『晚清小説研究通信』第1号 1985.4。張純「關於《繡像小説》半月刊的終刊時間」『徐州師範学

院学报』1986年2期 1986.6.15

- 4) 行数字数とも同一。ただし雑誌連載の都合で送り異なる。第2回の2ヵ所が単行本18頁で漢字が入れ替えられただけ。9行「福呀」→「福萋呀」。11行「令福萋」→「令他」
- 5) 中村忠行「吳構訳『賣国奴』その他」『中国文芸研究会会報』第24号1980.7.28。登張竹風の子息正實所蔵の再版本を示している。
- 6) 付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』北京・中国社会科学出版社2019.8
- 7) 陳大康『中国近代小説編年史』北京・人民出版社2014.1。略称「編年」②③。〔大康18〕は陳

大康「附録1 近代日報小説資料長篇」「附録2 近代小説専刊資料長篇」「附録3 近代翻訳小説資料長篇」『中国近代小説史論』北京・人民文学出版社2018.3 国家哲学社会科学成果文庫

- 8) 1例をあげる。日本尾崎徳太郎著、錢塘吳禱訳『(立志小説)美人煙草』上海・中国商務印書館、光緒三十二年歲次丙午季夏首版/光緒三十二年丙午九月二版、説部叢書第六集第三編(実藤文庫)がある。それが初集第53編奥付では「丙午年十月初版/中華民國三年四月再版」になる。元版の「丙午季夏(六月)」が後刷りの初集で「丙午年十月」に変更された。
- 9) 中村忠行「吳禱訳『売国奴』その他」『中国文芸研究会会報』第24号 1980.7.28
- 10) 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として(3・完)」『清末小説研究』第4号 1980.12.1
- 11) 闕文文『晚清報刊上の翻訳小説』済南・齊魯書社2013.5。「而《繡像小説》所登載の《小仙源》、《珊瑚美人》、《回頭看》以及《夢遊二十一世紀》、吳禱翻訳の《賣国奴》則是在連載之前就有了商務の単行本。將単行本自行拆開在雜誌上連載，在當時的刊物中比較罕見，也說明了這些翻譯小説的受重視程度」62頁。注：「夢遊二十一世紀」が該当する。
- 12) 上海・商務印書館1937.5/修正版。北京・作家出版社1955.8北京第一版(1958.3北京第二次印刷)ほか
- 13) 中村忠行「徳富蘆花と現代中国文学(2)」『天理大学学报』第2巻第1・2号 1950.11.26
- 14) 中村忠行「晚清に於ける文学改良運動」『国語国文』第21巻第1号 1951.12.15
- 15) 中村忠行「政治小説に於ける比較と交流」『文学』第21巻第9号 1953.9.10
- 16) 中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学——資料を中心として——2」『山辺道』第10号 1964.1.25
- お知らせ 陳鵬安(浙江財経大学日文系)の博士論文「吳禱翻訳研究」(北京師範大学、2020.6審査通過)があると知らされました(2022.1)。現在も見せていません。『清末小説から』に掲載した(する)吳禱関係の日本語論文は該博士論文とまったく関係がないことをここに明記します。

吳禱漢訳「大復讐」 —— 押川春浪「復讐」

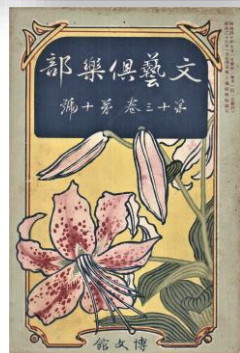
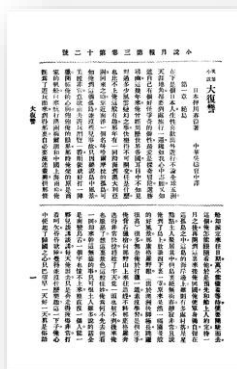
沢本香子

はじめに

本稿では日本押川春浪著、中華吳禱宣中訳「(英雄小説)大復讐」『小説月報』3巻12号(1913.3.25)を検討する。

吳禱が使用した底本については岡崎由美と渡辺浩司がすでに指摘している(参考文献)。

押川春浪「(英雄小説)大復讐」(『(英雄小説)大復讐』本郷書院1912.9.21所収。国立国会図



書館デジタルコレクション)だ。初出は「復讐」(『文藝俱樂部』第13巻第10号 博文館、1907.7.1。架蔵)である。

雑誌初出の「復讐」を単行本に収録したとき「大復讐」に改題した。呉禱漢訳も「大復讐」とする。底本に使用したのは単行本『大復讐』であることは指摘のとおりだ。該書所収の4篇から呉禱はほかに「老愛国者」を「拊髀記」(1913)に、「女侠姫」を「侠女郎」(1913)に漢訳して合計3篇がある。

ほかの呉禱漢訳で日本人が関係する作品を見れば黒岩涙香が実質2種、尾崎紅葉が2種だ。あとは1種類のみ。次のとおり。柳川春葉、石井ブラック、高須梅溪、田山花袋、原抱一庵、広津柳浪、薄田斬雲、中内蝶二、登張竹風、上村左川、大沢天仙、嵯峨の家主(矢崎鎮四郎)、長谷川二葉亭、坂口横次郎。訳者不明が2種ある。

以上のような漢訳状況だ。春浪作品(ドーデ原作を含む)を底本にして3種類もあるのは多い方だろう。単行本『大復讐』所収の4篇ともに漢訳している(内1篇は未発表。渡辺論文参照)。呉禱の好みに合ったらしい。

内容からいえば角書のとおり「女侠姫」は冒険譚だ。本稿の「大復讐」は英雄譚とする。いずれも少年少女向けに書かれた。「老愛国者」はドーデ「ベルリン包圍」である。その角書は「巴黎奇談」だが老人の妄想的冒険譚といえなくもない。少年少女と老人が同じだと考えれば確かに冒険という点で一致する。

目次の比較対照

雑誌初出に章題はない。単行本化の際に追加した。

春浪著([]は目次との異同個所)と漢訳の章題を対照する(ルビ省略。以下同じ)。目次の記述が複数箇所違うばあいは次行に書く。

春浪

呉禱

- | | | |
|----|-------------------------|------------|
| 1 | 南洋一孤島——双眼鏡を出して眺めた | 第1章 絶島 |
| 2 | 漁村の少年——露子と二人で町へ出た | 第2回 漁村 |
| 3 | 無念の血涙——荒波叫ぶ海中へ真逆様[に] | 第3回 舎生 |
| 4 | 甲板の偉丈夫——汝の生命を余に呉れぬか | 第4回 遇救 |
| | (目次) 甲板の怪傑——汝の生命を余に与へよ | |
| 5 | 復讐復讐! ——奈翁にも負けぬ英雄となつて | 第5回 勸業 |
| | (目次) 復讐! 復讐——奈翁を凌ぐ英雄となれ | |
| 6 | 二十万金——今日汝の生命を返す | 第6回 成功 |
| | (目次) 二十余万金——今日汝の生命をも返す | |
| 7 | 第一南洋丸——力雄君と私は叫んだ | 第7回 遠郷 |
| 8 | 異様の光景——遥かに見える一艘の難破船 | 第8回 拯難 |
| | (目次) " ——遥かに一隻の難破船が | |
| 9 | 嗚呼わが敵——構はぬ案内して貰はう | 第9回 憐讐 |
| | (目次) 我敵! 我敵—— " | |
| 10 | 故郷の山河——力雄君の顔を見上げてニツコリ | 第14[0]回 普濟 |
| | (目次) " ——顔を見上げてニツコリ | |

春浪は同一書籍内の目次と本文表記を一致させる努力を行なっていないように見える。細かいことは気にしない質らしい。呉禱はそれらを2文字でまとめた。

春浪作のおおよそ

春浪は「ハシガキ」において「大復讐」を指して「男性的の真の復讐を書いた積りで」と述べている。では「真の復讐」とはどういうものか。

世界各国を旅行している「私」がその見聞を紹介するという設定だ。春浪の『大復讐』所収

4篇のうち「幽霊小家」を除くほかの3作はそういう形式にしてある。

「私」の古い知り合い中藤力雄が今では第一南洋丸の船長になっている。久しぶりに再会した彼が自らの波瀾万丈な経歴を語る。

力雄は南海の一漁村の旧家に生まれた。両親に死別すると財産のすべてを村第2の旧家曲田剛蔵に横領されてしまった。困窮する力雄を助けたのが老人島崎達馬だ。露子という孫娘がいる。露子と一緒に例年の祭礼に行った。その際に曲田親子から暴力を受け傷つけられた力雄はくやしきのあまり海に身を投げる。偶然にそれを救助したのが雲井輝武(航海者、呑海王)だ。呑海王は乗船している第一濠洲丸において20年間の鍛錬努力を12歳の力雄に約束させた。力雄は曲田親子に復讐する目的を持って奮励し15年が経過する。彼は刻苦勉勵のすえひとりの偉丈夫に成長した。恩人島崎に送金することも忘れない。それでも呑海王に預けた蓄えも20万円(金)という膨大なものになる。呑海王は資本を提供して力雄に独立事業を起こさせる。そのように自分の過去を語った力雄がこれから実行するのが20年来の復讐だ。その内容とは故郷の漁村に帰り曲田が奪った家に百倍する雄大な家を建てて見返すことだった。曲田親子に精神的打撃を与えることを主目的とする。今まさに実行しようとしている。それに立ち会うのが「私」である。

故郷の漁村に近づいたところで難破船を発見した。救助する前に年来の仇敵曲田親子であることがわかった。助けたあとに出身を隠し知らぬ顔をして聞けば故郷の漁村は大火事、大津波により零落したという。村にもどった力雄はどのような復讐をするのか。「私」はかたずをのんで一緒に行った。故郷の惨状を目の当たりにした力雄は自分の20万円(金)を漁村復興のために寄付した。それが力雄の復讐だった。そこに恩人島崎老人が隣村からやってくる。一緒にいるのは嫣然と一笑する露子だ。

力雄の個人に向けての復讐は故郷を再興する援助に昇華してなしとげられた。これが春浪の考える「真の復讐」である。

世界を視野にいれて貿易事業にまい進する力雄にとって個人的復讐はすでに意味を失っていた。春浪は少年少女に向かってそういいたいのだ。

春浪作と呉禱漢訳

春浪作と呉禱漢訳の冒頭を示す(くり返し記号は文字に直した箇所がある。以下同じ)。呉禱の漢訳状況を知るためだ。

【春浪】私は旅行好きの一日本人で、自分でも余程好奇心な男だと思つて居る、数年以来世界各国を経廻り、いろいろ変つた事を見聞して、それを何よりの楽みとして居るが、先頃濠洲へ渡つて其帰途、南洋のハルモヒラと云ふ一孤島へ立寄つた。何も大した用向のあるのでは無く、此島の景色が非常に佳いと聴いたので、その景色を見物かたがた、カンガルー獵でもやらうと云ふ目的なのだ。2頁

【呉禱】在下面是個日本人。生性喜歡出外遊行不論全球五洲。天涯地角。都要到處旅行一遍。纔如我心中志願。又知道自己有個好怪争奇的僻性。最愛是探奇冒險。選勝尋幽。這幾年來。俺曾經周歷世界各国。耳目中不知見聞過多少風雲變幻之事。快樂得不可開交。任是什麼。也比不上俺這般有趣。那年一回跨海到澳大利亞洲。回來之時。靠近南洋一個名叫哈爾摩拉的孤島。可知俺到這個孤島。並沒些兒事故。只因聽說島中風景。美麗非當。意欲前夫遊玩瀏覽一番。順便就好打一陣獵。開拓俺的心胸。飽飽俺的眼界。1頁

私は日本人で、生来旅行を好み世界各国はもちろん天の果て地のはてまでも一度は旅行するのが私の念願である。自分でも怪

奇なことを好む性癖があることを知っているし、なんといっても探険冒険が好きだから僻地を選んで訪れている。ここ数年来私は世界各国を周遊して聞いたこともない、なんだか風雲変幻の事柄を見聞すれば楽しくてしょうがない。なんであれ私のこの興味とは比べることができないのだ。先頃オーストラリアへ渡ってからの帰途、南洋のハルモヒラという一孤島に立ち寄った。私はこの孤島に来て用事があるわけでもないことはわかっていたが島の風景が非常によいと聞いたのでちょっと見物のついでに狩りをして度量を広げ視野を満足させようと考えた。

日本語を漢訳すれば普通は原文よりも短くなるものだ。直訳したばあいである。ところが上の呉構漢訳では日文よりも文章量が増えている。原文を踏まえながら説明を増やしていることによる。日本語底本を基本的に堅持している。だから翻案ともいいにくい。

例を示せば単に「旅行好き」という日本語を漢訳して「生来旅行を好み世界各国はもちろん天の果て地のはてまでも一度は旅行するのが私の念願である(生性喜歓出外遊行不論全球五洲。天涯地角。都要到處旅行一遍。纔如我心中志願)」と詳細に説明する。そこまで増量しながらこの「カンガルー」は省略した。漢語「袋鼠」2文字ですむところだ。その不均衡さについていささか意外に感じる。もっともその後で音訳して「康格羅野獸(出於澳洲後脚極長。跳躍很高(オーストラリアにて後脚が非常に長く、高く跳躍する))」と「野獸」を添えた。カッコに説明をしたのは当時「袋鼠」は一般的ではなかったのだろうか。

狩りはうまくいかず暇つぶしもできず「私は二十世紀の俊寛島流しもどきで」(3頁)と嘆く。平家に対する陰謀を計画したと島流しになった僧俊寛は日本ではよく知られる。しかし呉構は

俊寛の名前を省略してここでも少し長い。

【春浪】イヤ飛んでもない場所へ来たものかなと私は二十世紀の俊寛島流しもどきで、頻りに閉口頓首して居ると、 2-3頁

【呉構】不想俺竟来到這個有翅難飛的處在好似犯了大罪。斷了二十世紀新定的流刑。發配到這荒島裏來一般。恁地想着。覺得一肚子的雄心。都拋往九霄雲外。只是唾着嘴。低着頭。好不叫人掃興味。2頁

翼があっても飛び越せないこんな場所に意外にも私はやってきたのか、まるで大罪を犯して20世紀の新しい流刑に処せられこの荒れ果てた島に流されたようだ。そう思えば心中一杯の勇壮な心持ちはすべて天空のかなたに飛んでいったように感じて、ただ口を開け頭を垂れてとても興ざめた思いをさせられるのだった。

直訳ではない。「俊寛島流し」は意図的に書き換えた。中華民国の読者は知らない。割注を使用する、あるいは訳者自身が文中に乗り出してきて説明する方法もあった。しかし呉構はここでそうはしなかった。

書き換えたが原文から遠く離れているわけでもない。呉構は内容を把握し大筋はそれに基づく。ただし部分によっては上のように文章表現について自筆による加筆と書き換えを行なっている。

加筆といえば各回の終わりは章回小説風にした。第1回「看官們留神聽著便了。看說出什麼話來(皆さまお気をつけてお聞きください、いかがなりますやら)」だし第2-9回は「且聽下回分解(さて次回につづく)」である。春浪作品にそれがあるはずもない。

曲田父子とその仲間から袋叩きにあい傷を負った力雄が口惜しく思い入水をする個所を比較対照する。呉構は登場人物の名前を春浪のままに使用している。

【春浪】今日剛蔵親子等に、云ふに云はれぬ恥辱を受けた事が身を切られる程口惜しく、力雄少年は最う無念と悲しさとの為に胸は一杯になり、あゝ寧そ一思ひに死んで仕舞つたならば、恩人にも苦勞を掛けず、此口惜しさも悲しさも消えるであらうと、少年は思ひ迫つてふらふらと、岬の絶端に踰踉めき寄り、荒波叫ぶ海中へ真逆様に飛込んだ。18-19頁

【呉禱】心裏上上下下。又是愧悔。又是氣憤。又是憂愁。想到無路可通的地歩。便嘆口氣道。天哪。我不如死了。倒還乾淨。那恩人的德惠。也顧不得答報了。我身上的悲傷怨念。也從此消滅了。恁地一想。便搶上幾步。跑到岬角盡頭。撲的望那蒼茫淼渺的海中。飛跳入去。便成了力雄一生的結果。不知力雄死後如何。且聽下回分解。10頁

恥じと悔やみ、憤慨と憂愁で胸は一杯になり、行くことのできる道がないことを感じて嘆息して言った。ああ神様、いっそ死んでしまったほうがかえってさっぱりする。あの恩人からの恩恵に報いられなくなるが、そうすれば私の悲しさと怨念も消滅するだろう。そう考えると足を速め岬の先に駆け寄ると広々とした海の中にドボンと飛び込んだからそれが力雄一生の結果(死去)になってしまった。さて力雄の死後はいかになりますやら、次回につづく。

春浪は少年力雄が海に飛び込むところで筆を止め次回につなぐ。死んだかどうかは説明しない。それが普通だ。物語は力雄の復讐譚だからここで終わるはずがない。日本の読者は知っている。

一方、呉禱はそれを一段と衝撃的に描写した。なにしろ「力雄死後如何」と書いて力雄を死なせたのだった。

そこからどう挽回するかが呉禱の腕の見せ所

となる。

【呉禱】話説力雄自尋短見。投入海中。料想早与波臣结伴。万無生還之理。也不知他死了多少時候。耳边忽聽得有人呼喚。陡然一驚。醒了過來。10頁

さて力雄は自殺するため海中に飛び込んだからすでに魚と連れになった(死んだ)と思う。万が一にも生き返る道理はない。死んでどれくらい経ったかわからないが耳元で人が呼びかけているのが聞こえたからびっくりして意識がもどった。

「也不知他死了多少時候(死んでどれくらい経ったかわからない)」である。すでに死亡している状態から無理やり生還させる力技を見せつけば民初の読者も驚くだろう。呉禱がそうした理由はどこかにあるはずだ。

もとなる春浪はそこを述べて次のとおり。「それから何時間絶つたかは知らぬが、力雄少年は耳許で頻りに呼ぶ人声がするので、フト正気に復つて眼を開けて見ると」(19頁)

注目点は「何時間絶つた」だ。呉禱はこの「絶つた」に惑わされた。ルビで「た」が振られているようにここは時間が「経った」の意味で使われている。それを呉禱は漢字に引かれて「絶つ」すなわち「自殺して命を絶つ」と誤解したようだ。呉禱漢訳には多くはないがそういう例を見かける。

小さな単語について触れておく。力雄と露子が見に行った祭礼には御輿(神輿)が出て子供たちが担ぎまわっている。春浪は「樽天王」(13頁)と書く。「樽御輿」ともいう。子供が担ぐように空き樽で作った(挿絵のものは本物だからそれとは異なる)。呉禱は日本への留学経験はない。日本語書物だけで学習したと思われる。ゆえに御輿を見たことがなかったか。あるいは知識として知っていても当てはまる漢語が思いつかなかった。そこで使用したのが「吃

食担子」(7頁)だ。これでは食べ物売りの担ぎ荷である。漢語では「神轎」という。しかし宗教的慣習から見てもそれを大勢で担ぐ行事はなかったと推測する。どのみち呉禱は「神轎」を使用しなかった。



春浪快着集2 国立国会図書館デジタルコレクション

力雄が吞海王の言いつけ通りに刻苦奮励する。その様子を描写するのに呉禱は原文にない中国の故事を挿入した。

【呉禱】自己鞭打自己。策勵自己。好比那中華晋代匡衡鑿壁偷光。列国蘇秦讀書刺股。14頁

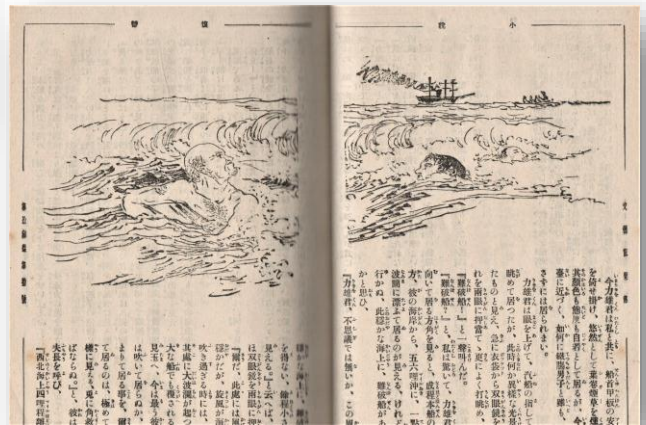
自分で自分を鞭打ち励ますのは、中華晋代の匡衡が壁に穴をあけて隣家の灯火で読書した、あるいは列国蘇秦が眠くなると錐をモモに刺して読書したようなものだ。

原文にある「^{ナポレオン}奈翁／^{ほうたいかふ}拿破崙」「豊太閤／豊太閤」も漢訳する。だが民初の読者にはそれに加えて伝説の逸話を示す方が理解しやすい。追加したといえはゴースキーの小説に出てくる人物

カインの容貌を説明して絵図の鍾馗を示唆したことがある(呉禱訳「憂患余生」1907)。直訳するだけで説明しないのは読者に不親切だという考えだろう。確かにそれを補助に使えば効果が期待できる。同じやりかただ。割注で説明したと考えればよい。

さらにいえば春浪には金額として「二十万円(金)」が出てくる。力雄が手にした15年間の報酬だ。呉禱はそれを「二十万銀円(銭)」とする。また具体的にトランク2個に詰めた「金貨」(37頁)は呉禱によって「銀円、銀銭」(26頁)に変えられている。銀本位制の時代だからそうする方が読者には理解しやすい。いずれも漢訳にとまなう許容範囲内の操作だと判断する。

力雄が難破船を発見して救助に向かい、そこで見た人物について次のように説明した。ふたりの会話だ。両者ともに表記のままに示す。



【春浪】力雄君は沈痛極まりなき声で、『わが仇、剛蔵と鹿蔵！』『何、剛蔵と鹿蔵、どれが？』『あの板子に縋着き、互に抱合つて、救助を呼べる二人の漁夫！』

斯く云つて両眼を閉ぢたが、47-48頁【呉禱】力雄這纔發出万分沈痛の声音。答道。我的讐人曲田家父子兩個！俺十分詫異。問道。怎麼。剛蔵和鹿蔵麼。這是怎？力雄

忽地閉著眼道。你瞧那一塊木板上。兩人抱著。大呼救命的兩個漁夫！22頁

呉禱は原文にある会話部分を示すカッコを使用していない。従来からの方法である「道」を用いて会話であることを示す。また改行しない。

上を見れば日本語のままを漢訳していることがわかる。しいて言えば語順を入れ替え「俺十分詫異。問道（私はとても奇異に思ったから尋ねた）」を挿入したくらいだ。それをしなければ話者の区別がつかないからだと思われる。直訳だからあとは翻訳しない。

力雄は荒れはてた故郷を見て復讐の気持ちが消滅した。彼は出自を明らかにして復興のために20万円を提供する。曲田親子を含めた村人全員がはいつくばっているところに島崎老人と露子が車でやってきた。露子は老人の手を引いて「昔の面影消えぬ美はしき露子、力雄君の顔を見上げて嫣然!!!」（61頁）で終了する。章題に「力雄君の顔を見上げてニツコリ」と採用するくらいに結びとして気に入った表現だ。

春浪は物語の結末をあっさり描写してそれ以上は述べない。ところが呉禱は春浪の唐突に見える終わり方では物足りなかった。文章を補足して修飾しないではいられない。

【呉禱】一隻手還携著一位嬌娘。毋消說得。便是桃花依旧春風越發添了幾分嬌艷的露子。他見了力雄。當場沒話可說。只望著力雄臉面。嫣然一笑。露子這一笑不打緊。却把力雄先前那種瘡痍滿目無限淒涼的境地。一霎時恍惚變做陽和煙景。大地回春。覺得天地四周。和他故鄉村落。都是花香鳥語。美滿繁華的景色了。27頁

（島崎老人は）片手でひとりの美しい娘の手を引いている。それは言うまでもなく、桃の花がかわらず春風によって艶やかさをいくらか増した露子だった。彼女は力雄に会ってその場は言葉もなくただ力雄の顔を

見て嫣然と一笑するだけだ。露子の微笑みはゆっくりとではあったが、力雄の以前の満身創痍ですべてが物寂しい境遇をいつの間にかぼんやりと暖かなよい風景へと変えた。大地に春がまたやってきて、天地のまわり全体と彼の故郷の村は花が香り鳥の鳴く幸せで繁華な景色になったように思えるのだった。

春浪原作とは反対に老人が露子の手を引いていることにしたのは小さな変更だ。締めくくりの「力雄君の顔を見上げて嫣然!!!」が呉禱によって自由に補足された。気のすむように追加してこれくらいの長さになった。

結論

呉禱は本作において一部に加筆、書き換えを行なっている。しかし清末民初時期において直訳でなければならないという認識は主流を占めてはいなかった。文芸関係では特にそうだ。省略、加筆、書き換えをほどこした各種の漢訳が混在した時代である。

比較しての程度問題になる可能性もある。細部に分け入り考察する。総合的にながめて基本的に忠実な漢訳であれば高く評価する。それが筆者の立場だ。

呉禱漢訳に少々に加筆装飾があるくらいは何も支障はない。本筋をたどり物語全体を維持しているからだ。日本語原文にほぼ忠実で上質な漢訳であるということが出来る。 罫

【参考文献】

- 岡崎由美「武侠の黎明——押川春浪と近代中国武侠小说」蘆田孝昭教授退休紀念論文集編集委員会『蘆田孝昭教授退休紀念論文集 二三十年代中国と東西文芸』東方書店1998.12.12
- 呉 燕『『燈臺卒』をめぐって』『清末小説』第33号 2010.12.1

渡辺浩司「《拊髀記》の原作」『清末小説から』第105号 2012.4.1

——「《愛國小説 鵠》の原作／《拊髀記》の原作(補)」『清末小説から』第106号 2012.7.1

趙 霞「二十世紀初留学生訳者特点剖析——以吳禱《小説月報》前期(1910-1920)翻譯作品為例」『中国近代文学学会小説分年会暨中国近代小説學術研討會論文集』開封・河南大学文学院2013.9

崔 琦「晚清白話翻譯文体与文化身份的建構——以吳禱漢訳《侠黑奴》為中心」『中国現代文学研究叢刊』2014年第3期(総第176期) 2014.3.15

文 娟「試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期(総第130期) 2018.10.15

荒井由美「吳禱についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1

包天笑漢訳ヴェルヌ『碧海情波記』
——森田思軒訳「大東号航海日記」

樽本照雄

(包)天笑訳『碧海情波記』全7章(上海・秋星社 宣統二(1910)年九月)がある。

1 底本

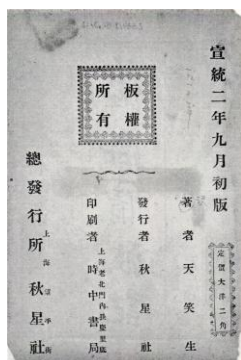
本文は吳門天笑生「訳」と示す。奥付は「著者：天笑生」だ。表示が異なる。翻訳か創作のどちらかといえば訳が正しい。ただし翻訳であるにもかかわらず包天笑は原作者、日本語訳者ともに表示しない。筆者の知るかぎり底本を指摘した文献はないようだ。

天笑漢訳の底本は日本語訳本である。仏国ビュールヴェルヌ(文中はジュールヴェルヌ)著、森田思軒訳「大東号航海日記」全7回という。

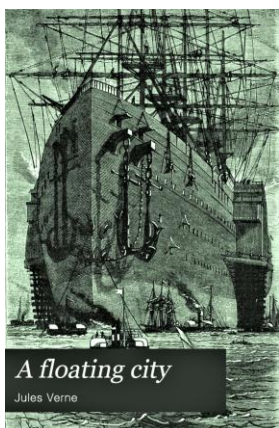
最初は雑誌『国民之友』第14-20号(1888.1.20-4.20)。ウェブサイト国立国語研究所収本を参照)に連載された。原書は英訳 JULES VERNE “A FLOATING CITY” 1874(フランス語 “UNE VILLE FLOTTANTE” 1871)だ*1。

天笑が使用した底本は何か。可能性は複数ある。

ひとつは雑誌『国民之友』の連載だ。天笑は日本で刊行される雑誌掲載の作品を漢訳したことがある。それは『冒険世界』だった。それを見れば『国民之友』も底本候補として残る。初出では登場人物名に英文からの読みをルビによ



影印本 奥付 表紙



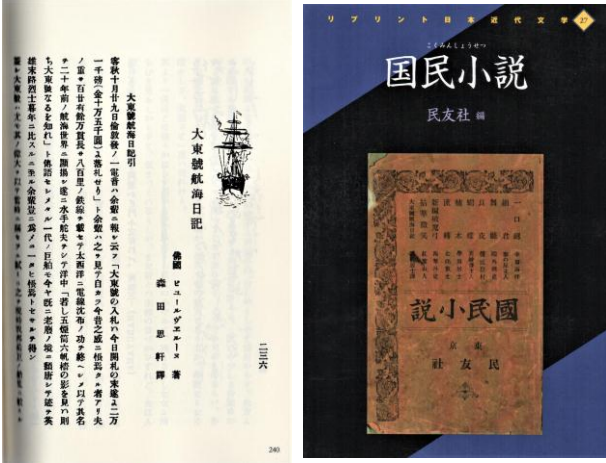
英訳



国立国語研究所収本

って示す。次の単行本ではそのルビが削除されていることを指摘しておく。

ふたつは『国民小説』第1(民友社1890.10.30。本稿では影印本を使用する)所収のもの。雑誌連載をまとめた。上のおりルビはない。

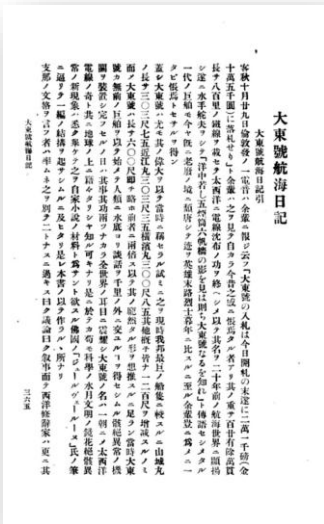


影印本 本文と表紙

もうひとつは石割松太郎編『思軒全集 巻一』(堺屋石割書店1907.5.1/金尾文淵堂1907.7.1再版)だ。

刊行年からして単行本2種ともに天笑が使用することができた。

ひとつの手がかりを示す。細かい部分だ。ふたりの名前にルビがつけてあるのは初出『国民之友』と全集だ。対照表を作った。



全集本

英 訳 p.105	Wilmore (Scotchman)	O'Kelly (Irishman)
国民之友 第5回	維毛児ウ井ルモー ル	王傑礼オーケリ ー
国民小説 269頁	維毛児	王傑礼
思軒全集 390頁	維毛児ウキルモー ル	王傑礼オーケリ ー
天 笑 32頁	維墨児	恩格利

名前が出てくる経過は省略する。問題は漢字の読みだ。振られたルビが底本が何であるのかを示唆しているのではないかと考える。

スコットランド人ウイモアを思軒が「維毛児ウ井(キ)ルモー」とするのはよい。維が「ウ井(キ)」、毛が「モー」、児が「ル」と対応する。またアイルランド人オケリが「王傑礼オーケリー」となるのも日本語では自然だ。オケリに似ている音の漢字を当てた。王「オー」傑「ケ」礼「リー」である。

天笑は「維毛児」をそのままを利用してよかった。だが「維墨児」と漢訳した。毛の漢語音 mao では日本語ルビの「モー」から離れる。墨の漢語音 mo であれば「モー」になる。ルビの表記が天笑に影響を与えたと考えられる。

次の王傑礼はもっとわかりやすい。オーケリー「王傑礼」については思軒の訳語を引き写さなかった。天笑はまったく異なる漢語「恩格利」を使用した。1字として合致しない。なぜか。それはそうだろう。天笑から見れば「王傑礼」では中国人になってしまうからだ。思軒の「王傑礼」から天笑の「恩格利」が出てくる可能性は極めて低い。その中間にルビの「オーケリー」があつてはじめて可能になる。

もうひとつ。Hodges (ホッジス) を思軒は「方爾ホツヂス」とした。しかし「方爾」を天笑が漢語音で fang'er と読めばホッジスにならない。ゆえに天笑は「方爾」を無視して独自に「霍起士 huoqishi」に変えた。これもルビを優先したことを示す。

さらに漢字の細かな違いを見る。初出の『国民之友』第20号該作第7回に「砦然(くわくぜん)」とある。次に収録された『国民小説』ではそれがルビなしで同じ「砦然」になる。『思軒全集』では違う漢字のルビなし「轄然」である。

天笑漢訳では「砦然」を使用した(砦と砦は同字)。以上のルビ使いおよび漢字の例を参照して天笑が使用した底本はルビ付きの初出『国民之友』だと考えていいだろう。

天笑漢訳題名の「碧海」は青海原をいう。「情波」は異性への愛情を波にたとえた。たしかに思軒日訳は大東号という巨大客船で展開される男女の愛情関係に筋を絞った。また関連して幽霊が出るという噂もある。船上で事故が発生し死人まで出てくる不思議な雰囲気はただよわす話だ。愛情物語に注目した天笑の漢訳題名は日本語訳と乖離しているわけではない。

2 天笑漢訳の改編者表記

天笑は思軒日訳からヴェルヌとユゴー作品のいくつかを重訳している^{*)}。それらを見れば天笑が底本に使用したのは日本で単行本になった作品が多い。少なくともヴェルヌ(迦爾威尼)とユゴー(鬮俄)についてはそう言える。

不思議なことだが天笑はそれらの漢訳作品の表面に思軒の名前を出さない。「表面」というのは本文、奥付などを指す。序などで思軒に言及することは除いている。ヴェルヌ原作からいえば英訳が第1翻訳だ。思軒は第2翻訳に当たる。翻訳者は改編者と同じ。第2翻訳(改編)者は基本的に示さないのが天笑のやり方ということができる。

思軒の名前を示さないからといって批判するには当たらない。当時は中間の重訳者を記述しなければならぬという決まりはなかったのだ。誰も気にしなかったしそれが問題だとも思わなかった。それが当時の中国翻訳界の実状である。

だからといって『碧海情波記』が原作者のヴ

ェルヌ名さえも記していないのはなぜなのか。疑問は残る。

もうひとつ。天笑が単独で漢訳した作品は主として日本語経由だった。日本語を介して外国作品を漢訳するのは天笑がそういう時代に生きていたからだ。ゆえに日本語訳を使用するならばなおさらその名前を明記してもよかったのではないか。だが天笑はそうは考えなかった。思軒のほかに黒岩涙香、破天荒生、木村小舟などを隠蔽している。

さて該作の英訳本は全39章196頁におよぶ。これが思軒日訳では全7回62頁に縮小された。表面をみただけでこの差だ。相当に省略をした。抄訳である。そうした理由は思軒自身が作品巻末に書いている(後述)。天笑漢訳も全7章であってここは一致する。

3 思軒識

冒頭に「大東号航海日記引」という思軒の説明文がある。「引」は引言、序文を意味する。

ロンドン電を引用して巨船大東号が落札されたと報じる。同時に紹介するのはどれほど巨大な船舶であるかということだ。ジュール・ヴェルヌがその大東号を自叙紀行体の小説にして書いたのがまさにこの作品である。「明治廿一年一月九日函根寓楼溪声山緑ノ間ニ於テ 訳者識ス」と末尾に記す。

天笑は漢訳した際にこの思軒識を削除した。本文中の記述と重複する箇所があるからかもしれない。日訳全部を直訳する気はなかったようだ。ここを削除したために原作者のヴェルヌ名が消滅してしまった。

巨船大東号(グレート・イースタン *SS Great Eastern*)はスクリューと外輪を併用する19世紀最大級の蒸気船(SS)である。最初は大西洋航路の客船として就航した。のちにイギリス・アメリカ間の大西洋を横断する海底電信線を敷設(第4回1865年、第5回1866年)して知られる。廃船を経て1867年のパリ万国

博覧会を機会にふたたび客船となった。以上のことはヴェルヌの作中で記述されている。

ヴェルヌ自身も該船に搭乗したことがある。その経験を作品執筆に生かしたという*3。

該船は1889年に解体された。思軒の識は1888年だからロンドン電にある落札というのは解体に向けて作業が始まったことの知らせだとわかる。大きな成果をあげた巨大船も進水した1858年から約30年を経て鉄塊になった。

なおヴェルヌ作品は原題を日本語に直訳して『浮遊都市』だ。あるいは『洋上都市』としても同じ。似た題名に『動く海上都市』(原題: *L'ÎLE À HÉLICE* スクリュー島、1895) また『動く人工島』がある。別作品だ。

4 本文

思軒日訳に対応する天笑漢訳を部分的に示す。まず本文冒頭から。英訳、日訳、漢訳の順。

On the 18th of March, 1867, I arrived at Liverpool, intending to take a berth simply as an amateur traveller on board the "Great Eastern," which in a few days was to sail for New York. p.1

1867年3月18日、私はリヴァプールに到着した。数日後にニューヨークに向けて出航するグレート・イースタン号に私的旅行者として乗船するつもりでいた。

【思軒】千八百六十七年(慶応三年)三月十八日に余はリヴァプールに赴けり是は数日の内に紐育に出帆すへき有名なる大東号に乗込まん心組のありたればなり 238頁

【天笑】一千八百六十七年三月十八日。余赴派白爾。聞数日之内。将有巨船大東号。掛帆向紐約行。嗚呼。大東号者。世界有名之航海巨船也。1頁

1867年3月18日、私はリヴァプールへ行った。数日のうちに巨船大東号が帆を掲げてニューヨークへ向かうことを聞いたか

らだ。ああ、大東号とは世界に有名な巨大航海船舶である。

日訳、漢訳ともに「余」を使用して一人称小説だ。天笑訳はほかにも「我」「吾」を使用する。思軒はグレート・イースタン号(the "Great Eastern")を大東号と直訳した。天笑もそれを踏襲する。

天笑が「掛帆」と漢訳したのは実際に帆を掲げることと出帆、出港をかけている。たしかに大東号は6本マストを有する。帆を使用したことはないと説明する文章もある。ただしヴェルヌ英訳では船長の命令で帆をあげる場面がでてくる(p.52)。その箇所を思軒は翻訳していない。だから天笑漢訳にも存在しない。

思軒は日本年号を注記したが天笑はそれを無視した。清末の読者には関係がないという判断でかまわない。ただし清朝の「同治」で置き換えることもできたはずだ。なぜだかそれはしていない。同じく思軒は文中に出てくる長さ重さ表記に日本の尺貫法を注記する。通貨価値についても同様。天笑はこれらすべてを黙殺した。ただしドル(dollars)表示について思軒は「弗」とし天笑は「圓」に置き換えた(p.153/289頁/51頁)。天笑に一貫した翻訳基準がないように見える。

大東号は乗客1,200名から1,300名を載せる予定だった。世界各地からの客を描写して次のとおり(日訳のくり返し記号は文字に直した)。

At half-past eleven the tender was hailed, laden with passengers, who, as I afterwards learnt, were Californians, Canadians, Americans, Peruvians, English, Germans, and two or three Frenchmen. p.17

11時半になるとハシケが到着して乗客を乗せた。乗客は後でわかったのだがカリフォルニア人、カナダ人、アメリカ人、ペル

一人、イギリス人、ドイツ人そして2、3人のフランス人だった。

【思軒】午前十一時半に至り一雙の端舟至れり是れにて未だ乗込まざる乗客は悉く到着せり余は甲板に在りて上り来る乗客を眺むるに米国、加那多、白露、南亜米利加、英国、曼国及ひ仏国等各地の人民ソレソレに其の種族に固有なる相貌骨格にて陸続と甲板に群かり立てり 244頁

乗船の様子を説明している。なんでもなさそうな場面だ。単語が並んでいるだけだが思軒の日記に英訳とは異なる部分がある。思軒はカリフォルニア人を訳さなかった。理由は不明。明治時代にはペルーを白露と表記した。当たり前だが二十四節気とは無関係だ。英訳には出てこない「南アメリカ(南亜米利加)」を加えた。ペルーと重複することを気にしていない。曼国は日耳曼(ジェルマン)を略記したもの。思軒は少し加筆しているがほぼ原文どおりとっていい。ただし英訳では続いて列挙される具体的な人名多数についてはすべて切り捨てた。たとえばニューヨークのサイラス・フィールド(the celebrated Cyrus Field of New York)という大西洋電信会社の設立者を含む。思軒は出てくる外国の著名人をそのまま日本語訳することに興味はなかったようだ。そういう意味でも抄訳である。

【天笑】至午前十一点半鐘。乗客悉集於船中。時余方在甲板。見乗客中。有美利堅人。有加拿大人。有秘露人。有南美各人。有法蘭西人。有英吉利与墨西哥人。其種族不同。而其相貌裝服。亦隨地而異。幾疑於船中開一人種博覽會矣。7頁

午前11時半になると乗客はすべてが船中に集まった。その時私は甲板で乗客を見ていたが、アメリカ人、カナダ人、ペルー人、南アメリカ各人、フランス人、イギリス

人とメキシコ人がいた。種族は違ふしその相貌服装もそれぞれ異なっておりまるで船中で人種博覧会を開催したかのようだった。

天笑がカリフォルニア人を省略したのは思軒のままだ。「曼国(ドイツ)」人をなぜだかメキシコ(墨西哥)人に漢訳した。勘違いだろう。「人種博覧会」を加筆した。細かい箇所が異なる。

次のような省略例もある。

Lat. 51° 15' N.

Long. 18° 13' W.

Dist. : Fastenet, 323 miles.

ここを見てすぐさま北緯東経と理解する読者はそれほど多くはないだろう。ヴェルヌはこれを説明して次のとおり。

This signified that at noon we were three hundred and twenty-three miles from the Fastenet lighthouse, the last which we had passed on the Irish coast, and at 51° 15' north latitude, and 18° 13' west longitude, from the meridian of Greenwich. p.62

これは正午にアイルランド沿岸で最後に通過したファストネット灯台から320マイル離れた場所であり、グリニッジ子午線の北緯51度15分、西経18度13分であることを意味していた。

大東号の航路を示す部分だ。ヴェルヌにとってその経過を記録することが関心事だった。だが思軒からすれば英訳の説明はあまりにも詳細にすぎる。日本の読者には不必要だと考えた。こういう箇所を省略しつつそれが重なって全体の紙幅が圧縮された。

細かいことだが思軒訳と天笑漢訳では数の表

示が一致しない箇所がある。英訳→思軒→天笑の順。

sixty-six horse-power p.21 七十馬力の機関 245頁 → 八十馬力 8頁

fifty of the crew → 水夫五十名許 → 三四十名之水手

killng four sailors, and wounding twelve others p.22 → 四人は即死し拾二人は重傷 246頁→負傷者十二人。受重傷而死者二人。9頁

馬力が英訳66と思軒の70で異なる。天笑はそれを80にするから首をひねる。そのほかは天笑が勝手に数字をいじくったように見える。その改変意図が不明だ。

天笑が日本語を見間違った例もある(傍点筆者)。

Salt Lake (ソルトレイク) p.149 → ソー
トレキ 286頁 → 壺脱蘭起 48頁

思軒の「ソー」に該当させるつもりで天笑の「壺」がある。これは日本語カタカナの「ソ」を「リ」と誤解したからだろう。漢字が多く使用されている日本語訳を底本にすると天笑は回想したことがある。漢字を頼りに翻訳したという意味だ。カタカナだけだと「ソ」「リ」「ン」の区別がつかない程度の日本語理解力だったものか。偶然にこの箇所だけかもしれない。細かい箇所だから大筋に影響を及ぼさないのは事実だ。呉禱がブラツクの「ツ」を「シ」と取り違えて勃拉錫克と漢訳したのと同じ。

本題にもどる。

3月26日、抜錨の作業中に船上で事故が発生し死傷者が出た。幸先の悪い出港だ。4月9日のニューヨーク到着までの15日間は巨大客船における生活である。

船中で旧知のファビアン・マック・エルウィ

ン (Fabian Mac Elwin) に出会った。思軒は丙敏フヘビヤン、天笑は賓爾敏と訳した。

ファビアンは友人だといってコーシカン大尉 (Captain Corsican/胡簡コルシカン曹長/胡簡礼) を紹介する。彼らはもともと別の汽船に乗る予定だったという。

Captain Corsican and I came to Liverpool with the intention of taking our berths on board the 'China,' a Cunard Steamer,..... p.30

コーシカン大尉と私はキューナード蒸気船会社のチャイナ号に乗船するためにリヴァプールにきました。

【思軒】胡蘭氏と余は実はキューナード会社の支那号にて米国に渡らんとし設うけりリバープールには至しか…… 247頁

【天笑】余与胡簡礼君。本欲乘迦那達公司之支那号船。以往美国。10頁

私と胡簡礼氏は本来ならばキューナード社の支那号に乗ってアメリカに行くつもりでした。

この箇所を引用対照するのには理由がある。英訳 the “China” (チャイナ号) を思軒が当時の名称で支那号と翻訳しているからだ。天笑は「支那号」をそのまま受け入れた。支那という単語に違和感を抱かなかったからである。普通に見れば無問題である。

しかし天笑が漢訳した「(科学小説) 空中戦争未来記」(『月月小説』第2年第9期(第21号) 戊申(1908) 九月) では扱いが異なっていた。こちらの底本は破天荒生「空中戦争未来記」(『冒険世界』第1巻第5号 博文館1908.5.5。渡辺浩司による) だ。文中に出現する「支那」を削除した*4。考えれば単なる船名と作品の大筋に関わる箇所との違いなのだろう。支那という単語を排除するという基本方針が固まっているというわけでもなさそうだ。

5 思軒日訳の本筋あるいは重点

船上で再会した旧友ファビアンの様子がおかしい。昔はいつも微笑して朗らかだった。ところが久しぶりに会った今は顔色が青く心を病んでいるような様子で鬱々としている。彼は波紋を眺めて「l」「e」という文字が見えるという。

Look at the 'l's' and 'e's' . p.64

→ ソレ l の字、ソレ e の字 256頁

→ 此為 l 字。此為 e 字。19頁

昔の恋人がエレン (Ellen) であることが後で明らかにされる。波間に文字を見るほどにファビアンが精神に異常をきたした理由がある。彼がボンベイ赴任中にある女性 (エレン) と恋仲になった。ふたりともに結婚を希望していた。しかし女性の父親が個人の事情を優先して別人に嫁がせてしまったというのだ。

at Bombay Fabian had known a charming young girl, a Miss Hodges. He loved her, and was beloved by her. Nothing seemed to hinder a marriage between Miss Hodges and Captain Mac Elwin ; when, by her father's consent, the young girl's hand was sought by the son of a merchant at Calcutta. p.67

ファビアンはボンベイでホッジス嬢 (エレン) という魅力的な女性と知り合った。彼は彼女を愛し彼女に愛された。ホッジス嬢とマック・エルウィン大尉 (ファビアン) の結婚を妨げるものは何もなく見えた。ところが彼女の父親の同意によって彼女はカルカッタ商人の息子に (品物のように) 引き渡された。

ヴェルヌ英訳では父親が動いた原因についてあいまいにしか書いていない。「昔からの仕事

の問題 an old business affair」であった。推測すれば娘を犠牲にして自分の財産を守ったというのだ。

【思軒】丙敏は孟買に赴任中方爾氏の女と相知る中となり丙敏も真心此の婦人を悦へは此婦人も実意丙敏を慕ひ兩人の相思の情は転た濃やかに成行きしか若し自然の成行きに任せなば兩人は遠からずめで度結婚するに至るへき筈なりしに爰に意外の不幸の起れるは此の婦人は父の意にて俄かにカルコッタの一商人に嫁さねはならぬ切迫となれり 257-258頁

思軒の日訳は英訳のとおりだ。事情急展開の理由についても「素と入組みある事情あり」としている。ただしそのままでは日本の読者には理解されないかと考えたらしく次を加筆した。すなわち「方爾氏は無慈無悲にも其女の精神の幸福を奪去りて之を己[己]れの事務上の欠算の填足しに充てり」(258頁)である。父親は娘を引き渡すことによって商売上の負債を解決しようとしたという意味だ。そう補足することで父親が借金を背負っていることを示唆した。

【天笑】蓋當賓爾敏君在孟買就職時。曾友一女郎。為霍起士家之女。賓爾敏深契此女郎。而女郎亦頗慕賓君。兩心相印。早種此情根於方寸中矣。已[已]而愈親密。即自外人觀之。亦為珠聯璧合。且轉瞬間[間]教堂結婚之令成矣。孰知好事多磨。中有為之梗者。則此女郎之父也。父之意。蓋欲令其女嫁一加爾各搭商人。20-21頁

さて賓爾敏君はボンベイで勤務中にひとりの女性と知り合った。霍起士家の娘である。賓爾敏は彼女を深く愛すると彼女も賓君をととても愛慕した。ふたりの心はぴたりとひとつになりその愛情は心の中に根をはった。ますます親密で外の人から見ればま

さに真珠がつながり玉が合わさるそのままだ。たちまち教会で結婚ということになった。あにはからんや好事魔多し、それを邪魔する者がいた。彼女の父親である。父親の考えは娘をカルカッタのある商人に嫁がせようとした。

天笑は漢訳するにあたり「珠聯璧合」「孰知好事多磨」などの慣用句を用いた。読者にしてみれば理解しやすいものになった。また思軒の加筆箇所を次のように漢訳する。「然則霍起士者。将奪其女精神上之幸福。以填其財界之缺陷(そうして霍起士は娘の精神的幸福を奪いそれでもって財務上の欠損を補填しようとしたのである)」。この部分は思軒日訳を直訳している。そればかりかその前部に少しの加筆もする。「大抵霍起士挙債多。恒取貸於加爾各搭商人(霍起士の借金が多いというのはたぶんカルカッタの商人にいつも借りていたからだろう)」。これを独自に付け加えることによってホッジスが自分の娘を引き渡した事情がより鮮明になると考えた。許容範囲内だ。

ファビアンは精神的に大きな傷を受けた。コーシカン大尉が付き添って気分を変える旅にでたというわけ。

エレンが無理やり結婚させられた相手はハリー・ドレイクだった。賭博師で破産している彼はファビアンとおなじ大東号に乗船していた。しかもエレンを伴っていることは隠している。

ファビアンがドレイクの存在を知れば決闘になる。ファビアンが勝ったとしても殺人者がエレンを妻にすることはできない。そうして決闘になった。

その前にヴェルヌによる伏線がはられていることを指摘する。決闘に使用する武器は剣(swords. p.144/剣。284頁/剣。46頁)だ。ピストルではない。次の雷と関連する。

大東号マニアのピットフェレグ博士は雲団の動きを見て嵐の到来を予測した。そればかりか

雷鳴を伴う雷光にうたれて自らの右腕麻痺が快癒した体験を話すのだった(p.151/287頁/49頁)。落雷が鍵語だ。

上陸前の晚餐に乗客の全員が食堂に集まった。それを機に人目につかない甲板で決闘が行なわれた。

ふたりは激しく剣を交わらせた。休息の後、ファビアン優勢に進んでいるように見えたが突然彼は自分の剣を取り落した。万事休す。そこにエレンが飛び込んで来たのだった。

His uplifted blade gleamed as though on fire ; one might have said it was the sword of the archangel Michael in the hands of a demon.

彼の振り上げた剣はまるで火のように輝いていた。あるいは悪魔の手に渡った大天使ミカエルの剣だと言う人もいるかもしれない。

Suddenly a brilliant flash of lightning lit up the whole stern. I was almost knocked down, and felt suffocated, for the air was filled with sulphur ; but by a powerful effort I regained my senses.

突然、鮮やかな稲妻の閃光が船尾全体を照らした。私はほとんど倒されそうになった。空気が硫黄で満たされて窒息しそうになるがどうにか努力して感覚を取り戻した。

I had fallen on one knee, but I got up and looked around. Ellen was leaning on Fabian. Harry Drake seemed petrified, and remained in the same position, but his face had grown black.

Had the unhappy man been struck when attracting the lightning with his blade ? p.162

私は片膝をついていたが立ち上がって周囲を見回した。エレンはファビアンにもたれかかっていた。ハリー・ドレイクは茫然

とした様子で同じ姿勢を保っていたが彼の顔は黒くなっていた。

不幸な男は剣で雷を引き寄せて打たれたのだらうか。

ドレイクは自分の握った剣が引き寄せた雷に打たれて死亡した。これが決闘の結末だ。

【思軒】其の手中に握れる剣はビリビリとして顫ひたり／折しも一道の電光の颯然と閃めき来りて若然たる雷鳴と共に全船を震ひしが非常の響きに余は覚へず其の處に昏倒せり一種の異臭は四辺に満ちて鼻を穿つばかり余は兎角して力を極め僅かに我身を擡げしが始めて己れに復へりて視れば余は片膝を折れる儘そこに跪き居りしなり、四方を看まはせば丙敏は倒んとする恵連を左腕に抱きて突立ちたり、杜令は左手に剣を掲げたる儘元の如く屹立せるか其面は正黒になりてフスぼりたり 295頁

大天使ミカエル部分は省略した。また「全船」「異臭」と単語に細かな違いはあるが無視できる範囲内だ。大体は直訳であるといつていい。

【天笑】乃以手中之劍。望空而劃。忽觸於鉄柱。遽聞若然一声。電火四迸。作非常之巨響。全船為之震動焉。斯時我已昏倒不省人事。乃微醒。但覺滿船有一種異臭。棘鼻而刺腦。余極力举我軀。始復其旧。然而吾膝尚踞於地也。举目四矚。乃見賓爾敏方扶此已倒之蔓荅於左腕。而杜蘭其則左手提劍。仍屹然矗立於甲板。其面目則焦黒矣。56-57頁

手中の剣を天空に向けて突き立てるとまるで鉄柱に触れたように突然バンという音がして電気の火花が四方に飛び散りとてつもなく大きく響いた。そのため全船は震動したのである。その時私は昏倒し意識を失

った。ようやく気がつくとき全船にはある異臭がたちこめて鼻をうがち脳を刺激する。私は力をつくして自分の身体をあげてようやくもとに戻った。しかし私の両膝は地面についたままである。周囲を見回せば賓爾敏は倒れた蔓荅をちょうど左腕にかかえている。杜蘭其は左手に剣を持ち甲板に屹然と突っ立っておりその顔面は黒焦げであった。

思軒日記に大天使ミカエルがないのだから天笑漢訳にそれが存在するわけもない。この部分は直訳になっている。

6 思軒抄訳の理由

思軒の後記に説明がある。部分的に引用する。「本書は原名 A Floating City と題し紙数殆ど二百ページに及び」「本話のうちに就ても航海中の天気はじめ他の細事を綴述せる所頗る多し」「其の航海中の細事にして本話に関係なき者とナイヤガラ瀑布一段の記事とを省ふき修めて本話七回と為せり」296頁

思軒の考えによってファビアンとエレンの愛情物語を本話にしている。それはそれでひとつの翻訳の仕方だ。落雷を決闘場面に結びつけて終了としたのは小説の見せ場として優れている。

天笑はこの思軒識と後記を省略した。そのため原作者と原作名が消滅してしまったのは残念なことだった。それ以外はほぼ思軒日記に忠実な漢訳になっているといえる。 ㊦

固有名詞対照表

英 訳	思 軒	天 笑
the“Great Eastern” グレート・イースタン号	大東号	大東号
the“China” チャイナ号	支那号	支那号
Captain Anderson アンダースン船長	アンドルソン 船長安得孫	船長安得孫
Captain Fabian Mac Elwin ファビアン・マック・エ	フヘビヤン曹長 丙敏	賓爾敏曹 長

ルウイン		
Dr. Dean Pitferge 博士ディーン・ピットフ エレグ	ピット 医学士必度	医学士畢 士度 ⁵
Archibald Corsican アーチボルド・コーシカ ン	コルシカン 胡簡	胡簡礼
Hodges ホッジス (父)	ホツヂス 方爾	霍起士
Ellen Hodges エレン・ホッジス	エルレンEllen 恵連	蔓荅Ellen
Harry Drake ハリー・ドレイク	ハーリードレーキ 皮黎社合	皮黎社蘭其

【参考文献】

- 富田 仁『フランス小説移入考』東京書籍株式会社
1981.3.27。55、60頁
- 富田 仁『ジュール・ヴェルヌと日本』花林書房
1984.6.20
- 秋山勇造「森田思軒『埋もれた翻訳——近代文学の
開拓者たち』新読書社1998.10.20。79-113頁
- 白石静子監修『森田思軒とその交友——龍溪・蘇
峰・鷗外・天心・涙香』松柏社2005.11.30。100
頁／「明治21年(1888)1月-4月 ヴェルヌ
「大東号航海日記」を『国民之友』に連載。

【注】

- 1) 英訳本は以下を使用する。JULES VERNE “A
FLOATING CITY AND THE BLOCKADE
RUNNERS” (1876) 1904, LONDON AND
NEW YORK : GEORGE ROUTLEDGE AND
SONS 英訳者不記 (HENRY FRITH という)
open library 所収
- 2) おおよそだけを示す。詳しくは樽目録を参照の
こと。
ヴェルヌ(迦爾威尼)原作
○「秘密党魁」『小説時報』7-10期 宣統2.10.1-
宣統3.5.15(1910.11.2-1911.6.11)
(渡辺浩司) JULES VERNE “LA MAISON À
VAPEUR” 1880。日訳『大叛魁』(思軒居士訳、
1890.9.21)からの転訳
○『(地理小説) 秘密使者』上下巻 上海・小説
林社 上巻1904.6 下巻1904.8 小説林(叢書)

JULES VERNE “MICHEL STROGOFF DE
MOSCOU À IRKOUTSK” 1876。英訳 “MICHAEL
STROGOFF”。ヴェルヌ著、羊角山人訳述、
森田思軒刪潤「盲目使者」『郵便報知新聞』
1887.9.16-12.30。改題『警使者』報知社 上
1888.5.15/下1891.11.2 (DAVID E. POLLARD)
○『(科学小説) 鉄世界』15章 上海・文明書局
光緒29.6(1903)

JULES VERNE “LES CINQ CENTS MILLIONS
DE LA BÉGUM” 1879。英訳 “THE BEGUM'S
FORTUNE”。紅芍園主人(森田思軒)訳「仏・
曼・二学士の譚」『報知新聞』1887.3.26-5.10。
後、単行本『鉄世界』集成社1887.9。「此書由日
本森田思軒本転訳而来」

○『(国民小説) 無名之英雄』上中下冊 上海・
小説林社 上冊1904.8 中冊1905.3 下冊
1905.6 小説林(叢書)

JULES VERNE 著、英訳は “FAMILY
WITHOUT A NAME”。原作者不記、(森田) 思
軒居士訳『無名氏』春陽堂1898.9.11

ユゴー(囂俄)原作

○『(哲理小説) 鉄窗紅涙記』28章 『月月小説』
1年1号-2年6期(18号) 光緒32.9.15-戊申
6(1906.11.1-1908.7)/上海・群学社図書發行所
宣統2.3(1910)/思軒全集ではない

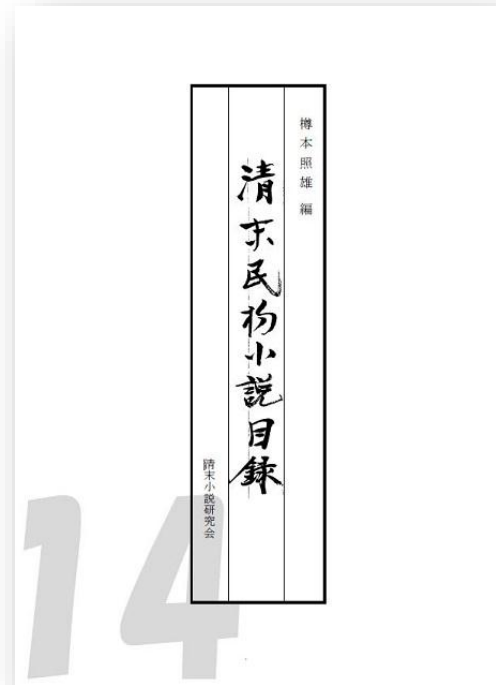
VICTOR HUGO “LE DERNIER JOUR D'UN
CONDAMNÉ” 1829「死刑囚最後の日」。ユーゴ
ー作、思軒居士訳「死刑前の六時間」『国民之友』
第309号附録-335号(1896.8.15-1897.2.13)(仏国ウ
井クトル、ユーゴー著、森田文蔵(思軒)訳『ユ
ーゴー小品』民友社1898.6.4所収)

○『(侠奴血)』小説林総發行所 乙巳11(1905)/
思軒全集ではない

VICTOR HUGO “BUG-JARGAL” 1826。ヴ井
クトル、ユーゴー著、森田思軒訳『懐旧』民友社
1892.12.16

- 3) 「少年小説大系」第13巻 長山靖生編『森田思
軒・村井弦齋集』三一書房1996.2.29。610頁
- 4) 荒井由美「包天笑「空中戦争未来記」など(下)』
『清末小説から』第137号2020.4.1
- 5) 思軒日訳の「ピット」を包天笑が「畢士度」と

漢字を当てたのには理由がある。日本語の「ツ」を「シ」と読み間違えたからだ。ゆえに「シ」を「土」と漢訳した。呉構漢訳にも同一例がある。



空前の収録件数 第14版公開 研究するための目録です

『清民初小説目録』は最先端の研究成果を吸収して成長しつづけています。

本第14版では信頼できる文献にもとづき新聞雑誌に掲載された作品を大量に増補しました。その数は従来から収録している単行本とあわせて過去最多です(総47,778件。目録本文は8,145頁)。

「最良、最新、最大」を目指した結果をここに発表します。これほど大規模な清民初小説目録は中国にも存在しません。

電字版(120MB)で無料公開していますから研究者は自在に利用検索ができます。探索の対象が広く深くなれば新しい発見につながるかもしれません。

清末小説研究会ウェブサイトをご覧ください。研究のお役に立てば幸いです。

(2022.7.3)

次号の公開は2023年1月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

アンデルセン最初の漢訳「裸の王様」

——台湾版「某侯好衣」

沢本郁馬

日本ではアンデルセンの「裸の王様」で知られる。最初の漢訳に関する新発見を紹介しさらに情報を追加する。

従来からいわれる漢訳の歴史

ハンス・クリスチャン・アンデルセン (HANS CRISTIAN ANDERSEN、1805-1875) 作「皇帝の新しい衣裳」(1837)である。英訳は“THE EMPEROR'S NEW CLOTHES”また“THE NAKED EMPEROR”ともいう。

清民初小説の漢訳を発表順に挙げれば次のようになる(未見を含む。原作者名は省略)。

- 1 周作人訳「皇帝之新衣」『紹興公報』1911? (未確認 張治による)*1
- 2 半農(劉半農)訳「(滑稽小説)洋迷小影」『中華小説界』1年7期 1914.7.1*2
- 3 緑筠女史訳「(埃及童話)金縷衣」中華図書館『女子世界』4期 1915.4.10 (未見)
- 4 陳家麟、陳大鏡訳「国王之新服」『(社会小説)十之九』上海・中華書局1918.1 (未見)
- 5 趙景深訳「国王的新衣」『少年雑誌』10巻12号 1920 (未見)

上にあげた漢訳の底本はたぶん英訳だと思う。しかし英訳は多数ある。それぞれを特定することは困難だろう。

周作人訳「皇帝之新衣」はのちに重版した『域外小説集』(上海・群益書社1921)に収録される。日本東京で刊行した該書の初版である第1冊(1909.3.2)と第2冊(1909.7.27)には未収録だ。それらの刊年を見れば周作人は当時まだ「裸の王様」を漢訳していなかったことになる。

周作人は『知堂回想録』(1970)において当時のことを記述している。

辛亥帰国後給紹興公報訳的安兌爾然(今通称安徒生)的「皇帝之新衣」281頁*3

辛亥に帰国してのち『紹興公報』にアンデルセンの「皇帝の新衣」を翻訳した。

周作人が魯迅に促されて羽太信子と一緒に日本から帰国するのは1911年秋のことだった。帰国後に翻訳したというのだから1911年秋以後になるという理屈だ。

1に示したように張治は「皇帝之新衣」が1911年の『紹興公報』に掲載されたかと断定した。筆者が見るところ上の周作人回想録にもとづいたのだろう。しかし彼が根拠と『紹興公報』の月日を明記しないところが不審だ。実物で確認していないのではないかと。張治は英語が堪能で林訳ほか多くの原作を発掘している。優秀な研究者であることは間違いない。ただごくまれに根拠を示さず引用して言明することがある。筆者の知る限りこれが第3例目だ(誤っているのならご指摘いただきたい)。

ほかの研究者が『紹興公報』掲載「皇帝之新衣」に言及していてもその論拠は『知堂回想録』を出ない。筆者は『紹興公報』を見る機会を持たない。そのかわりに「皇帝之新衣」と『紹興公報』に関連して傍証を示す。

張菊香、張鉄栄編『周作人研究資料』上下冊

(天津人民出版社1986.11) および張菊香、張鉄栄編著『周作人年譜(1885-1967)』(天津人民出版社2000.4)が詳しい。『紹興公報』に掲載された周作人(頑石)の文章を複数指摘している。「偵竊」は記載する(614頁/85頁)。しかし「皇帝之新衣」は見えない。

同じことは陳大康年表についてもいえる。【編年④2033】は該誌に掲載された周作人作品を次のように記録する。頑石(周作人)「(短篇小説)偵竊」(『紹興公報』1910.7.26)。陳大康が同じ『紹興公報』から「皇帝之新衣」をなぜ採取しなかったのか。これも疑問が生じる理由のひとつだ。

3件の資料がそろって『紹興公報』の周作人訳「皇帝之新衣」を採録していないのは偶然の一致だろうか。

疑わしいと思うその結果は次のようになる。実際には掲載されていないのではないかと。

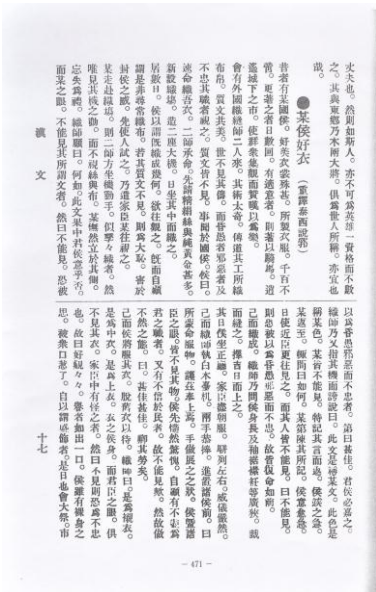
周作人は自分が翻訳した底本について後日いろいろ書いている。時には記憶違いのこともある。ゆえに「皇帝之新衣」を1911年の『紹興公報』に公表したという回想が信頼できるかどうか、筆者はこれに疑問符をつける。

周作人漢訳の初出未確認を含めて清末民初における漢訳「裸の王様」の発表状況は以上のとおりだ。



ここに新発見が加わる。頼慈芸が「安徒生的第一箇中文訳本不在中国、而在日治台湾——〈某侯好衣〉」（2017）*4を書いて提出した。最初の漢訳「裸の王様」は中国ではなく台湾で発表されたという。それが「某侯好衣」だ。1906年だから周作人漢訳（1911年として）に比べて5年も先行する。

新発見の「某侯好衣」



国会図書館所蔵影印本（ひるぎ社1994）

その漢訳について目録風に記す。

某侯好衣（重訳泰西説鄂）

未署撰者名

『台湾教育会雑誌』「漢文報」50号

明治39（1906）.5.15

〔慈芸17-344〕安徒生「国王的新衣」。

従日文転訳。全文を収録する

略号〔慈芸17-344〕は該当論文と頁数を示す。漢訳「某侯好衣」は漢字4字だから題名としては座りがいい。しかし日本語に直訳すれば「ある領主が衣裳を好む」だ。翻訳作品名としてはそぐわない。題名らしく「領主の衣裳好み」

とする。

「西洋小説からの重訳（重訳泰西説鄂）」とある。もともと英訳本ならば（デンマーク語のことは忘れて）「訳」だけにするだろう。重訳とわざわざ記すのは当時の台湾という場所からして日本語訳を底本にしていると推量できる。

頼慈芸は漢訳に使用された活字を根拠にして日本語からの転訳だと明記する。

頼慈芸の説明は次のとおり。台湾が1896年から日本領となっても統治政府は漢文を禁止しなかった。新聞雑誌には漢文版もあったという。ただし植字に使われた記号に特徴がある。日本人ではよく見られるくり返し記号、たとえば「々」（同ノ字点）などを使用している。それが日本風だ。日本統治時代の漢語雑誌によく見られた（344頁）。そういう解説だ。

例を示している。漢訳「某侯好衣」のある個所に「好観々々」（好看の意味）と活字を組んでいるのが日本語の記号だというわけ。

頼慈芸は紹介をそこで終了させた。文章の主旨は明確だ。アンデルセン最初の漢訳「裸の王様」は中国ではなく台湾で発表されたということにある。論旨は完結しているから問題はない。

しかし筆者から見れば物足りない。中途半端に終わった感が残る。なぜならさらに一步踏み込み日本語底本を探索することが必要だと考えるからだ。

漢訳の内容が主要な手がかりである。また使用されたくり返し記号も手助けとなる。

日本語底本の特定

頼慈芸が漢訳全文を該書に収録している。短文だから可能だった。それを読むと見たことがある。

すぐ気づいたのは坪内雄三（逍遥）著『国語読本（高等小学校用）』巻6（1900）に収録されている「領主の新衣」*5だ。

明治期に日本で使用された教科書のひとつである。それが台湾で流通したとしても不思議で

はない。



扉と本文、奥付

冒頭部分を比較対照する。

【逍遙】昔、或国の領主に、着物道楽の殿様が^マあった。夥しく、着物を仕立てさせて、一日に、幾度も〜着換へ、気に入ったのがあれば、それを着て、馬で、城下を乗り廻り、町のものに見せびらかすのを、何よりの楽みとせられた。』^マ22丁オ

【台湾】昔者有某国侯。好美衣裳殊甚。所製衣服。千百不啻。更著之者日数回。有適意者。則著以騎馬。逍遙城下之市。使群衆集觀而讚嘆以為樂。17頁

昔、ある領主は美しい衣裳をことのほか好んだ。仕立てさせた着物はおびただしいだけでなく、日に幾度も着替えた。気に入ったものがあればそれを着て馬に乗って城下を練り回り、群衆を集めて見せびらかせて称賛させるのを楽しみとした。

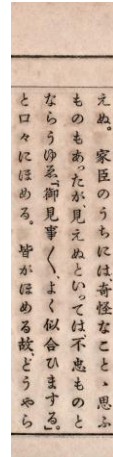
「^マ」のくり返し記号が「くの字点」と呼ばれる。台湾版はほとんど逐語訳だ。上記部分では記号を使用せず「数回」と言い換えている。

皇帝は新衣を見せてまわるために一行を従えて列をなして歩く。これがアンデルセン原作だ。逍遙はそこを書き換えて領主を馬に乗せた。騎馬についても台湾版は逍遙本に従っている。

「くの字点」が使用されている個所を示す。

領主は外国からの詐欺織師が織ったという新衣裳を身に着けた。殿の目にも家臣の目にも何も見えない。

不見其衣。家臣中有怪之者。然曰不見則恐為不忠也。故曰好觀々々。譽者如出一口。侯雖有裸身之思。被衆口惹了。自以謂感飾者。是日也會大祭。市



台湾版 逍遙本

【逍遙】家臣のうちには、奇怪なことゝ思ふものもあつたが、見えぬといつては不忠ものとならうゆえゑ、「御見事〜、よく似合ひまする。」と口々にほめる。25丁ウ

【台湾】家臣中有怪之者。然曰不見則恐為不忠也。故曰。好觀々々。譽者如出一口。17頁

家臣のなかには怪しんだ者もいたが、しかし見えないといつては不忠になるため、皆は「綺麗々々」と口をそろえてほめた。

ほぼ直訳だといつていい。くり返し記号は逍遙本では「くの字点」だが台湾版は「同ノ字点」におきかえた。

アンデルセン原作の結末はあっさりしている。皇帝は子供大人から「裸だ」と嘲笑されたが最後まで着衣を装い行列の歩みをやめようとはしなかった。

しかし逍遙本はアンデルセン原作にはない終わり方をする。領主たちは騙されたことに気づき、詐欺師はさっさと逃げたことをつけ加えた。

【逍遙】殿も家臣も、今更に、はっと心づ

き、さては、織師の悪者にだまされたのではないか、と、急ぎ、館へはせ帰って、「織師を呼び出せ。」とのゝしたが、もう遅い。悪者の織師は、とうに逃げ去って、影もなかった。27丁オ

【台湾】至此侯及群臣始憮然自悟。為奸人所誑也。急還館。罵曰。疾呼二織師來。將寸斷之。而二織師既逃去。杳無蹤跡矣。18頁

こうなって領主も家臣たちもはじめて悪人にだまされたことに気づいてがっかりした。急いで館へもどると「ふたりの織師を早く呼んでこい。切り刻んでやる」と罵ったが、ふたりの織師はすでに逃げ去って影も形もなかった。

結末まで両者は一致する。逍遙本が台湾版の底本である証拠だ。

アンデルセンはデンマーク語で作品を書いた。英訳によって世界に流布する。本稿で紹介した台湾版「某侯好衣」が成立するまでの経過を図式化すれば次のようになる。

デンマーク語原作→英訳→逍遙日本語翻訳→漢訳「某侯好衣」

上に示した2の劉半農訳「洋迷小影」の成立にも日本語訳が絡んでいる。ただし劉半農のばあいは日本語訳から発想のヒントを得たのみ。彼なりの書き換えをしている(別稿参照)。日本語教科書を直訳した「某侯好衣」はその点において半農漢訳とは異なる。 罎

【参考文献】

- 楊 焄「“哎呀，聽聽這小孩子——安徒生童話在中國式的推介與翻譯」『文匯學人』(第376期) 2019.1.18 電字版
- 楊 焄「《皇帝的新裝》傳入中國後，為何吸引了衆多翻譯、創作和研究者的關注？」ウェブサイト「搜狐」2019.3.4 電字版

- 簡 平「安徒生的到來」『北京晚報』2020.7.13 電字版
- 甄 陶「安徒生童話的早期翻譯」ウェブサイト「澎湃新聞」2021.3.1 電字版

【注】

- 1) 張治『中西因緣：近現代文學視野中的西方「經典」』上海社會科學院出版社2012.8。66頁。詳細な日付を書いていないとくり返す。該当部分は次のとおり。「1921年，上海群益書社出版增訂本《域外小說集》，周作人補入了一篇《皇帝之新衣》，這是第一篇漢譯安徒生叢話，最早發表於1911年的《紹興公報》上，依然採用文言詁法」
なお次の目録をあげる。編者不記(郭輝)『清末民初報刊小説目録(1815-1919)』期刊卷、報紙卷(出版社、刊年ともに不記。2021.12入手)。ただし目録には『紹興公報』それ自体を採取していない。収録雑誌が多いにもかかわらず該誌未収録は珍しいから掲げた。
- 2) 次を参照のこと。「劉半農「洋迷小影」——杉谷代水「(狂言)衣大名」」『清末小説から』第149号 2023.4.1
- 3) 周作人『知堂回想録』上下冊 香港・聽濤出版社1970.7
- 4) 頼慈芸「安徒生第一個中文譯本不在中國，而在日治台灣——〈某侯好衣〉」『翻譯偵探事務所：偽訳解密！台灣戒嚴時期翻譯怪象大公開』台灣・蔚藍文化出版股份有限公司2017.1/2020.8 二版二刷
- 5) 坪内雄三(逍遙)著、第10課上、第11課下「領主の新衣」『国語読本(高等小学校用)』巻6の22丁オ-27丁オ。富山房1900.10.2/1901.8.23訂正四版。架蔵。また阿部正恒『坪内逍遙の国語読本』バジリコ株式会社2006.12.22 所収。こちらは原本奥付を収録しない。

陳景韓漢訳ル・キュー「虚無党奇話」

——松居松葉『虚無党奇談』

神田 一三

【前言】本稿を執筆し終わったあとで梁艶論文（参考文献を参照）を読んだ。失われた陳景韓漢訳を発見した優れた文章だ。ただしそれにより本文を書き直してはいない。梁艶による指摘は本文の該当箇所注記するにとどめた。

ウィリアム、ル、キュー原著、松居松葉訳『虚無党奇談』（警醒社書店明治37（1904）.9.20。扉は「キュー」）がある。

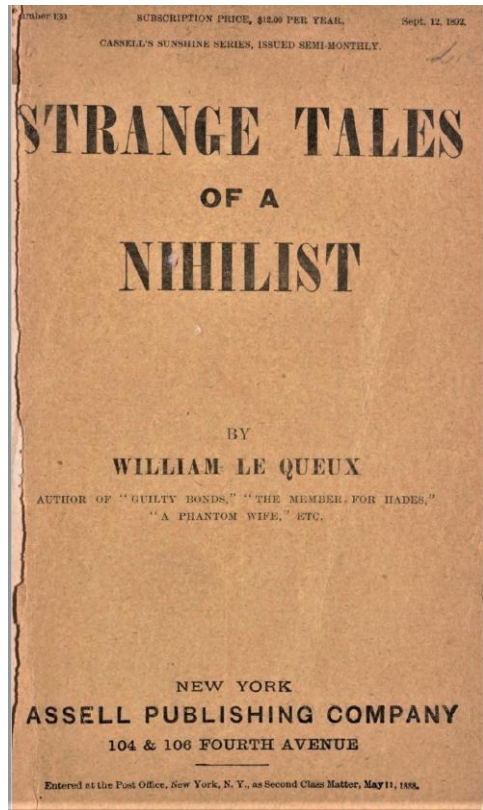
松居松葉（本名真玄、1870-1933）は劇作家、小説家、翻訳家だ。

松葉訳は6篇を収録する。次のとおり。

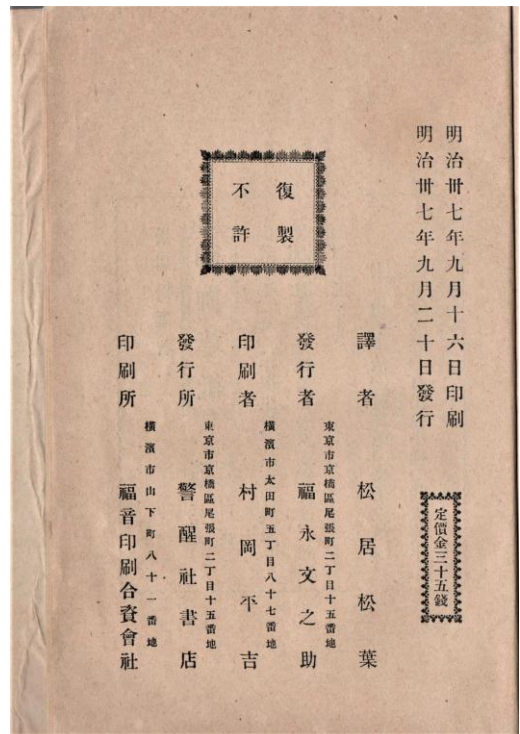
- 一、恐ろしき政府
 - 二、シベリアの雪
 - 三、わが友伯爵夫人
 - 四、露国皇帝の生命
 - 五、人民を売る犬
 - 六、皇帝の間諜（一 あひゞき／二 美人の死骸／三 不忠主義）
- 附言 グローブ新聞の記事

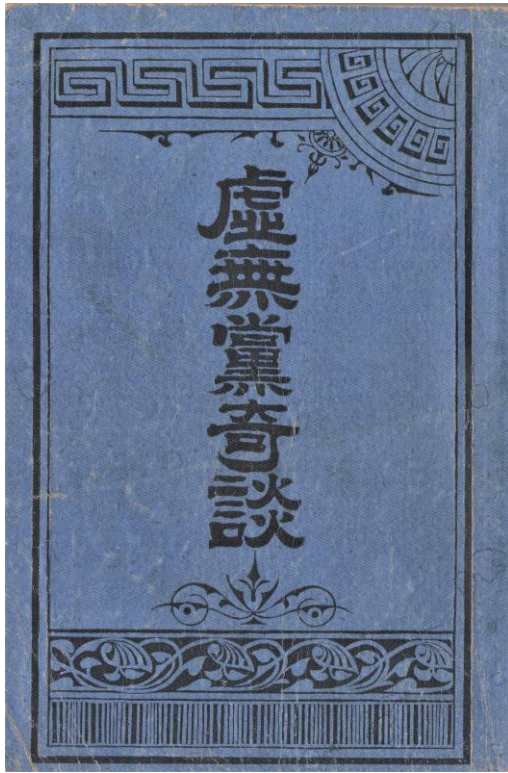
中村忠行は、この松葉訳を漢訳したものが陳景韓「虚無党奇話」だと推測した（1973）*1。それは正しかった。

「ウィリアム、ル、キュー原著」とあるよう



library of congress 所収





架蔵

に原本は WILLIAM LE QUEUX “STRANGE TALES OF A NIHILIST” NEW YORK: CASSELL PUBLISHING COMPANY, 1892 (library of congress 所収) である。これには 12篇を収録する。以下のとおり。

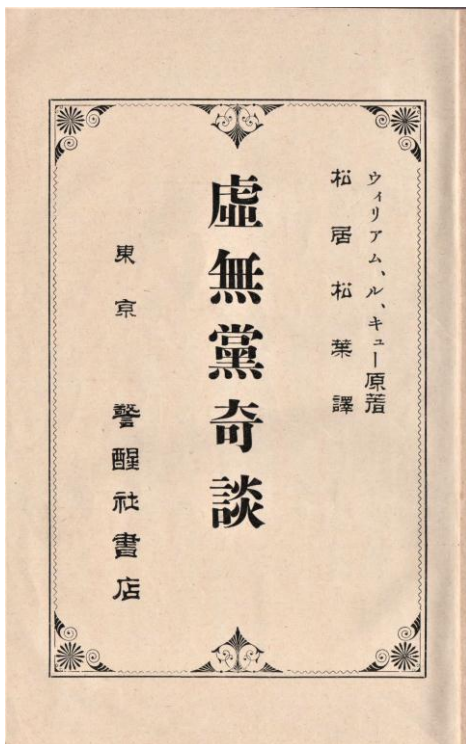
- I. A CROOKED FATE,
- II. ON TRACKLESS SNOW,
- III. MY FRIEND, THE PRINCESS,
- IV. THE BURLESQUE OF DEATH,
- V. SOPHIE ZAGAROVNA'S SECRET,
- VI. BY A VANISHED HAND,
- VII. THE JUDAS KISS,
- VIII. AN IMPERIAL SUGAR PLUM,
- IX. FALSE ZERO,
- X. THE MYSTERY OF LADY GLADYS,
- XI. AN IKON OATH,
- XII. THE TZAR'S SPY,

松葉はル・キュー原作12作品の半分を日訳したとわかる。(本文末に作品対照表を掲げる)

なお次がある。“A SECRET SERVICE: BEING STRANGE TALES OF A NIHILIST” LONDON: WARD, LOCK & CO., 2nd ed. 1896 (hathi trust、google books 所収)。この再版本は1892年初版とは収録作品が異なる。また主人公の名前は Anton Prèznev と変更されている。初版はそれとは違い Vladimir Mikhailovitch だ。松葉の日訳はそう記述する。ル・キュー初版によったと考えていい。

渡辺浩司の指摘

松葉訳を底本にして漢訳したのが陳景韓だ。その『月月小説』に連載した3作品については早くから渡辺浩司による詳しい記述がある。樽目録X(第7版を指す 2015.10.10公開。現在は第14版 2022)より掲載している。次に引用する。振った漢数字は松葉訳の番号を示す。



三 「(虚無党叢談之一 短篇小説) 女偵探」 上下マ下 冷(陳景韓) 『月月小説』 2年1-3期(13-15号) 戊申(1908) 人日(2.8) -三月

(渡辺浩司) WILLIAM LE QUEUX “STRANGE TALES OF A NIHILIST” 1892 中の “III. MY FRIEND, THE PRINCESS”。漢訳箇所は日訳箇所と一致するので、松居松葉訳『虚無党奇談』(警醒社書店1904.9.20全訳ではない) 中の「三 わが友伯爵夫人」からの転訳かも知れない

四 「(虚無党小説) 爆烈弾」 上下 冷(陳景韓) 『月月小説』 2年4-6期(16-18号) 戊申(1908) 四月-六月

(渡辺浩司) 掲載は、2年4期(16号)、2年6期(18号)。WILLIAM LE QUEUX “STRANGE TALES OF A NIHILIST” 1892 中の “IV. THE BURLESQUE OF DEATH”。漢訳は未完。漢訳箇所は日訳箇所と一致するので、松居松葉訳『虚無党奇談』(警醒社書店1904.9.20,全訳ではない) 中の「四 露國皇帝の生命」からの転訳かも知れない

五 「(虚無党小説) 俄国皇帝」 上中編 冷(陳景韓) 『月月小説』 2年7-9期(19-21号) 戊申(1908) 七月-九月

(渡辺浩司) 掲載は、2年7期(19号)、2年9期(21号)。WILLIAM LE QUEUX “STRANGE TALES OF A NIHILIST” 1892 中の “VIII. AN IMPERIAL SUGAR PLUM”。漢訳箇所は日訳箇所と一致するので、松居松葉訳『虚無党奇談』(警醒社書店1904.9.20全訳ではない) 中の「五 人民を賣る犬」からの転訳かも知れない

該誌掲載の陳景韓作品には漢訳という表示はない。渡辺はル・キュー原作ばかりでなく松葉訳の短篇題名を指摘した。これが新しい。また「転訳かも知れない」と慎重に記している。陳

景韓は日本語を理解する。そこから見ても漢訳3作品の底本は当たっているだろう。原題と松葉訳の「三 わが友伯爵夫人」「四 露國皇帝の生命」「五 人民を賣る犬」を提示して明快だ。

その後ネットで公表された陳景韓の漢訳に言及する文章、目録を読んだ(詹宜穎論文を除く)。松葉訳と陳景韓漢訳が一部で一致しない。誤解が発生しているのは意外だった。渡辺によって正解が提出されていることを知らないらしい。準備不足で誤記することは誰にでもある。本稿の目的はその間違いを批判することではない。松葉訳にもとづく陳景韓漢訳を整理しなおすことを主旨とする。

以上を見れば、松葉訳の三から五までを陳景韓が漢訳し『月月小説』に掲載したのはわかる。普通に疑問が生じるだろう。その一と二、あるいは六の陳景韓漢訳はないのか。

先行文献を読み目録を調べればすぐに判明した。ひとつは『新新小説』である。一と二ばかりでなく三までも掲載されている。三は『月月小説』掲載の「女偵探」が別にある。それと重複するのかと疑問が出るだろう。あとで説明する。

『新新小説』のばあい

『新新小説』に掲載された陳景韓漢訳をまとめて示す。ル・キューと松葉の書籍については同じだからくり返さない。作品名だけを取り出す。

一 「(虚無党奇話 俄国侠客談) 第一 政府……地獄」 冷血(陳景韓) 訳 『新新小説』 第3号 光緒三十年十一月初一日(1904.12.7)

松葉訳「一、恐ろしき政府」。原作は “I. A CROOKED FATE (曲がった運命)”

二 「(虚無党奇話 俄国侠客談) 第二回 西比利亞之雪」 冷血(陳景韓) 訳 『新新

小説』第4期 光緒三十年十二月初一日
(1905.1.6)

松葉訳「二、シベリアの雪」。原作は“II. ON TRACKLESS SNOW (道なき雪の上で)”

三 「(虚無党奇話 俄国侠客談) 第三 我友伯爵夫人」 冷(陳景韓)訳 『新新小説』第6期 光緒31.2.1 (1905.3.6)

未完。松葉訳「三、わが友伯爵夫人」。原作は“III. MY FRIEND, THE PRINCESS (わが友、伯爵夫人)”

三 b 「(虚無党奇話 俄国侠客談) 第三 伯爵夫人(一)」 冷血(陳景韓)訳 『新新小説』第10期 光緒三十三年四月初一日 (1907.5.12)

未完。松葉訳「三、わが友伯爵夫人」を抄訳して再掲載。原作は“III. MY FRIEND, THE PRINCESS”

陳景韓漢訳の三「第三 我友伯爵夫人」と三 b「第三 伯爵夫人(一)」はどちらも底本は松葉訳「三、わが友伯爵夫人」だ。重複するのはなぜか。この奇妙な事実については後で述べる。

各作品について簡単に紹介する。

一 「第一 政府……地獄」

松葉訳「一、恐ろしき政府」—— I. A CROOKED FATE (曲がった運命) である。

冒頭部分を対照して見る(ルビ省略。2字のくり返し記号は文字に変換する。以下同じ)。

【原作】 Brief forewords are necessary to this record of facts. / I, Vladimir Mikhalovitch, subject of the Tzar, now in exile in England, hereby make a free and full confession of my secret alliance with the socalled Nihilist Party. p.1

この事実の記録には簡単な前書きが必要

である。／私、ウラジーミル・ミハロビッチは、ロシア皇帝の臣民であり、現在イギリスに亡命中であるが、いわゆる虚無党との秘密の関係についてここに自由かつ十分に告白する。

【松葉】 いよいよ本文にとりかゝる前に、自分の身の上をお話して置くことが必要である。／今や不幸にも、かく英吉利に流竄の身となつて居る自分は、露国皇帝の臣民浦出見信露好(ルビ：うらでみるのぶろすきー)といふのが、本名である、私は所謂虚無党といふものと秘密の関係を結ぶに至つた其事情をば、茲に白地に、十分に告白しやうと思ふ。1頁

松葉訳は基本的に一人称で語られる。ロシアのユダヤ人がなぜ反ロシア皇帝の虚無黨員になったか。どういう行動を實際に取つたかを主人公が詳細に述べる。松葉訳は6篇を選択して集めた連作短篇集である。

語り手はロシアのユダヤ人ウラジーミル・ミハロビッチ(Vladimir Mikhalovitch)だ。松葉は日本漢字を当てて浦出見信露好(うらでみるのぶろすきー)とした。その浦出見はたしかにウラジーミルに近い。ただしミハロビッチに信露好では音が離れる。「露好」だけを見れば日本の読者は「ロシアが好き」と連想するだろう。そういう意味ではなく松葉はロシア語の「ロスキー」の個所にはその漢字を当てている。

明治時代の日訳に固有名詞をまったくの日本風に置き換えるというのを見かける。上の例でいえば「浦路見晴」などにしてもよかった。だが松葉はその方法は採用しなかったということだ。原音に近い漢字を当てながら少し自由に翻訳したとわかる。

陳景韓の漢訳を見る。

【陳景韓】 諸君！不才於這本文發端之先。不得不先在己身上。說了幾句。不才姓普。

名天。号公憤。今雖不幸。流竄在這倫敦英國。原来也是我堂堂俄羅斯帝国民の人民。不才因与這虚無党。有十分秘密的關係。今想要藉這區區名字。略略表白我們虚無党的苦心熱血。并且稍訴不才歷來身受的苦境。諸君、幸稍留意！1頁

諸君！ 私は本文発端の前に自分の身の上についてまず少し話しておかざるをえない。私は姓を普、名を天、号を公憤という。今や不幸にもイギリスのロンドンに亡命しているが、もともと堂々たるロシア帝国民の人民である。私は虚無党と十分に秘密の關係を持っているから、今この私めの名前を使用してわれらが虚無党の苦心と熱血を告白し、かつ私がこれまで身をもって受けてきた苦境を訴えようと思う。諸君、なにとぞご注意あれ！

陳景韓の漢訳は直訳ではない。話し手の姓名を普天、号を公憤と書き換えているところからもわかる。社会の悪に対する憤り（公憤）をわざわざ号にしているところに陳景韓の把握の方向が表われている。

細かな違いはある。松葉訳にもとづきながら陳景韓なりの表現をしているといっている。

本書の主題は物語の最初に出てくる話し手の言葉に表出している。すなわち「独裁と自由のどちらが好ましいか（whether Autocracy or Freedom is to be preferred）」（p.2）だ。そこを松葉は「専制政治と自由と、そのどちらを諸君は望まるゝかという一事であるのだ」（2-3頁）とする。ほぼ直訳である。

陳景韓は「『諸君。願為専制国的人民。還是願為自由国的人民？』」（2頁）とカッコに入れて強調した。すなわち「諸君は専制国の人民となりたいか、それとも自由国の人民になりたいのか？」だ。訳文それぞれの表現に違いはあるが本来の意味は伝えている。

ウラジーミル（以下主人公と称する）はユダ

ヤ人だ。父（Isaac／松葉：愛作／陳景韓：露好。表示順は以下同じ）はサンクトペテルブルクの証券取引所の仲買人で一家は裕福な生活を送っていた。3歳下の妹マーシャ（Mascha／増香／香児）がいる。主人公が兵学校に入っているあいだに不幸が起こった。父が逮捕されシベリア送りになると母と妹は窮乏生活に陥る。母妹が流れ着いた先はユダヤ人居住地で2年来の農作物不作により飢餓状態だった。

陳景韓はその地区について松葉訳にはない加筆を行なっている（7頁）。過去は裕福だったと述べて現在の極貧を際立たせたかったようだ。約8行（半ページ）もの加筆創作だが物語の大筋にはたいして影響はしない。しかし陳景韓にはそうすることが必要だったらしい。正確な漢訳よりは陳景韓の判断で底本に加筆削除するのである。

妹は母のためにパンを求めて知事の家まで行ったが追い返される。帰宅してみると母は餓死していた。後をつけて来た知事から性的暴行を受けかけて抵抗している時、知事の所持していたピストルが落ちる。妹は知事を射撃した。原文、松葉訳と陳景韓漢訳を引用する。

【原作】 Mascha, in desperation, had resorted to the last extremity in defense of her honor. p.22

マーシャは死にもの狂いで自分の名誉を守るために最後の手段に打って出た。

【松葉】 殆ど半狂乱の増香は、此の如くして自分の名誉を、僅に保護することを得たのであつた。32頁

【陳景韓】 且説當時香妹打死了知県。雖然逃過了一時危難惹了這場大禍。更是大不得了。想要逃。沒有錢。又沒有人。又沒有去處。逃往那裏。想要隱秘。這樣打死知県の事。又是俄國警察的利害。如何隱秘得過。18頁

さてその時、香妹は知事を撃ち殺した。

一時の危難を逃れたとしても、この大災を引き起こしたからにはもっと大変だ。逃げたいと思っても金はない、知人はいない、行き先がない。どこかに逃げて秘密にしたくても知事を殺したのだから、厳しいロシア警察からどうして隠れることができるだろうか。

ル・キューは妹が知事を射撃したことだけを述べている。松葉は原文のとおり訳した。だが陳景韓はそれだけだと物足りないと思った。上のように加筆する。

逮捕された妹は公開鞭打ちの刑に処せられる。その現場に到着した兄(主人公)が乱入する。彼も同じく鞭打ちの刑を受けた。ふたりとも終身懲役となりシベリア鉦山送りが決まった。ロシア皇帝に復讐するために彼は虚無党になる。

陳景韓は「さて私が次回でゆっくりお話ししますのを待たれよ(且俟不才再於下回慢慢説来)」と章回小説風に結んで、次の「二、シベリアの雪」に続く。

二 「第二回 西比利亞之雪」

松葉訳「二、シベリアの雪」——II. ON TRACKLESS SNOW(道なき雪の上)である。

約100名の老若男女が流刑地シベリアまで徒歩で移動させられる。苛酷な状況が淡々と記述されておりそれがかえって読者の恐怖を増加させて効果がある。

陳景韓は加筆をするが一方で省略もする。

移動する囚人のなかに20名ほどの女性がいた。その中のひとりマリー・クートウゾウ夫人(Madame Maerie Koutowzow p.34/鞠阿工藤夫人まりあくどうぞう 49頁/弓藤夫人 7頁)は主人公が見知っていた未亡人だ。ロシアの官吏が結婚を申し込んできたのを手酷くはねつけた。復讐された結果がこうして囚人の身である。陳景韓はこの前後約8行にわたる夫人の話題を

すべて削除した。理由は不明。加筆も削除も自由にしている。

この夫人はもう1ヵ所に出てくる。たどり着いた別の牢獄で囚人たちがくり広げる食料争奪戦に参加できなかった。食事を取ることなく熱病になって6日目に死亡する。松葉は原文どおり丁寧に説明した。

陳景韓はなぜだかこちらは削除しなかった。「簡単にいえばその中にクドウゾウ夫人という人がいる。名門の家柄の出身であるから家にあつては安楽に暮らすのに慣れていた。牢獄に入れられてから1ヵ月余にもならないうちに熱病にかかって死んでしまった(単説内中有個弓藤夫人。出身也是個世家大族。在家裏時。安享慣的。到了獄裏。不到一個多便染了一場熱病。就嗚呼哀哉了)」(7頁)

陳景韓は夫人の移動部分を省略したから彼女が1ヵ月余も牢獄に居ることに変更せざるを得なかった。変更するくらいなら前例と同じく省略してもよかつただろう。だが夫人については完全削除はしなかった。陳景韓はどうしても一部を残したかつたらしい。

最終地の鉦山に到着する前に主人公はコサック騎兵のスキをつけて脱走した。超人的な行動と幸運にもめぐまれ警察の追及を振り切って太平洋側にたどり着く。港に停泊していたカナダ漁船でロシアを脱出した。

陳景韓による細かな書き換えがある(15頁)。

松葉訳文ではこうだ。主人公は逃げて港に到着した。そこで探偵(police spy)から不審尋問を受けそうになった。彼は意を決して警察署に入り旅行券を示したが、署長によりその所有者がすでに死んでいることを見破られた。そこからただちに脱走した(73頁)。

陳景韓は変更して警察署を省略する。巡査ふたりが尋問して旅券の嘘をあばくことに変更した。さらにそうなった原因を推測するという底本にない加筆までしている。ここは小さい変更だから筋運びを左右しない。松葉訳そのままを

漢訳するのではなくどこかに手を加えたいらしい。

陳景韓の漢訳は以上のとおり直訳ではない。大筋を押さえたうえで彼の筆は比較的自由に動く。作品に触れられていない箇所であっても彼が必要だと考える部分には独自に説明を加える。このように省略しながら補足するという作業を見れば、陳景韓の漢訳姿勢がわかる。すなわちある部分では陳景韓は松葉訳を利用してほとんど自分の作品を創作している。ことばを変えれば日本語訳文は陳景韓にとって創作をするための素材のひとつにすぎない。原文を忠実に漢訳する方法とは別の方向をめざしているという意味だ。翻訳家よりも作家である側面が強く出ている箇所があるといってもいい。

こうして「三、わが友伯爵夫人」に続く。

三 「第三 我友伯爵夫人」

松葉訳「三、わが友伯爵夫人」——III. MY FRIEND, THE PRINCESS (わが友、伯爵夫人)である。

ロンドンに逃れた主人公は当地にある虚無党実行委員本部の探偵となった。あるとき男女党员23名が捕縛処刑された。密告者はストラトノフスキー (Stratonovski/須虎土、能鋤伊すとらと、のうすきー/水多羅 (水多) また奴密克 (奴克)) 伯爵夫人だと特定される。伯爵夫人を殺害するよう主人公に命令が下された。姓名についての陳景韓漢訳は松葉訳を写している。

彼が伯爵夫人に近づいたのはアベニュー劇場 (Abenue Theater/阿部尼座あべにいぎ/阿部戯館) だった。親密になったふたりは伯爵夫人の邸宅で語り合う。夫人は歳のはなれた伯爵との不幸な結婚を嘆いて主人公を愛すると心情を吐露して涙する。

ここまでが『新新小説』第6期掲載の「第三我友伯爵夫人」である。文末に「未完」とあるとおりだ。陳景韓の漢訳は細かな省略はあるにしても大筋はほぼ松葉訳そのままを把握してい

る。

次の同誌第10期に掲載されているのは当然その続きだと読者は思う。ところがそうではない。話が新しく始まっているのには驚く。

奇妙なことだと言わざるをえない。ふたつは「第三」を共有してこちらは「第三 伯爵夫人 (一)」だ。章題は似ているがこの (一) が物語の再度の始まりを示す。どういうことか。

比較するためにもとのル・キュー原作、松葉訳、『新新小説』第6期の陳景韓漢訳について冒頭を引用する (下線は筆者)。

【原文】 Few Londoners are aware that the headquarters of the most powerful secret organization in the world exist in their midst. The unsuspecting persons who pass up and down a certain eminently respectable thoroughfare in the northwest suburb, would be somewhat surprised if they knew that in one of the houses the Nihilist Executive Committee holds daily council and matures the plots which from time to time startle Europe. p.54

世界で最も強力な秘密組織本部が自分たちの中心部に存在していることを知るロンドン市民はほとんどいない。北西郊外のある非常に立派な大通りを行き来する無防備な人々は、その家のひとつで虚無党実行委員会が毎日のように会議を開き、時おりヨーロッパを驚かせる陰謀を熟成させていると知ればいささか驚くことだろう。

【松葉】 如何に炯眼なる倫敦子でも、倫敦の中央に、世界中で一番勢力のある秘密結社の大本営が有ることは知りはしまい、日々毎日北西の郊外に於ける有名なる市上をば、来往して居る幾多の人に対しては、何人も嫌疑の目を注ぎはしないのであるが、一たび其仮面を脱するや、彼等は其市上の或家に集会して、日毎の如く会議を開き、

絶えず欧羅巴を聳動する大陰謀を企てつゝ、あるといふことを知るに至つては、何人も驚かない訳には往くまいと思ふ。そして其家に集まる人々こそ、実に虚無党の実行委員なるものであるのだ。75頁

松葉の下線部分が原文と一致しない。原文では「(大通りを行き来する)無防備な人々は、その家のひとつで虚無党実行委員会が」となっている。「一たび其仮面を脱するや」も松葉の加筆だ。虚無党員は普段は仮面を付けて一般人になりすましているという意味だ。見れば「虚無党実行委員会」を含む箇所を後ろに移動させて別の文章にしたとわかる。それ以外に問題はない。

冒頭の記述は、日々陰謀を計画している虚無党実行委員会がほかならぬロンドン中心部に存在していることの意外性を読者に強く印象付ける。

陳景韓漢訳を見る。関係部分のみ区別するために掲載誌名を略して示す。

【新新6】倫敦府内の明眼人。却也不少。只是没一個。能辨得出。這倫敦府中。竟有一個極大極有勢力的秘密社会在內。每日在那府的西北。有名的各個市鎮。往來奔走。諸多秘密社会中人。誰疑心他。到了時候。一脱假面。便在市上旧家聚會。議論的却是震動全歐的勾當。諸君！這秘密社会不是別的。就是世界有名的虚無党人。1頁

ロンドンに炯眼の士は少なくないだろう。ただし、このロンドンに巨大で強力な秘密組織があり、その西北のそれぞれ有名な場所を毎日往來奔走している多くの秘密組織の人間に対しては誰も疑わないのだが、ひとたび時がくると仮面を脱ぎ捨てるやただちに市中の旧家に集まって議論するのは全ヨーロッパを震動させる悪事だと知ることのできる人はひとりもない。諸君！この

秘密組織とはほかでもない世界的に有名な虚無党員である。

ここでは松葉の勘違いと加筆を含んで陳景韓はほぼ直訳している。

三 b 「第三 伯爵夫人(一)」

問題は後(第10期)の陳景韓漢訳「第三 伯爵夫人(一)」の方だ。ふたたび同じ箇所を漢訳して次のとおり。

【新新10】且說不才自從逃至倫敦以後。便跟了同來的人。到了倫敦的西北角上。離開市稍遠。過了一處大街。街旁有個小弄。進了弄。走不到幾步。便有一帶板牆。中間開着大門。(後略)1頁

さて私はロンドンに逃げて来たあと、同行の人と一緒にロンドン西北角の繁華街から少し離れたある大通りを渡った。道沿いの路地に入って数歩も行かずに板塀がある。そこに表門が開いている。

ロンドン、西北、塀に囲まれた虚無党実行委員会のある建物など、たしかに松葉訳にはある。しかし主人公を本部に案内する同行者がいるのは違う。彼をロシアからアメリカに運んだ漁船について虚無党の通信船(2頁)だ、とここでわざわざ説明する。それも原文には存在しない。

基本的な状況設定は合っているにしても手を入れ過ぎて別作品のようだ。

男女党員23人が逮捕された原因はストラトノフスキー伯爵夫人(ロシア政府の秘密探偵)の密告による。夫人の以前の訳名は水多羅(水多)だった。こちらでは奴密克(奴克)だけを使用している。

伯爵夫人に死刑宣告が下されたあと、その実行を命じられたのは主人公(不才、我)だ。また事前に伯爵夫人の肖像写真を手渡されるというのも陳景韓による変更だ(3頁)。まだある。

伯爵夫人は24、25歳であることを前回はそのとおりに漢訳した(3頁)。今回は21、22歳でより若くしている(4頁)。しかも別の虚無党員が原作とは異なる伯爵夫人の経歴までも説明する(5頁)。加筆が過ぎて松葉訳から離れる。

前回は松葉訳のとおり伯爵夫人と主人公が夫人の邸宅で親密な面会をしているところまで描写した。だが今回はそこまで筆が伸びない。自分の家族の復讐をするためには伯爵夫人を殺害することが必要だと決心して物語は中断する。

松葉訳を底本にしていながら陳景韓漢訳がどうしてここまで異なってしまうのか。かといって完全に松葉から離脱するわけでもない。人物の基本的構成および物語の筋運びは一致している。ただしこちらは漢訳というよりも翻案部分が増加した。

『月月小説』のばあい

上述のとおり松葉の「三 わが友伯爵夫人」は『新新小説』において「第三 我友伯爵夫人」と「第三 伯爵夫人(一)」になった。両者は内容が似ているが同一ではない。奇妙な重複のしかたをして両者ともに中断した。

三 「女偵探」上下下——3度目の漢訳

みたび松葉訳「三 わが友伯爵夫人」——III. MY FRIEND, THE PRINCESS(わが友、伯爵夫人)である。

陳景韓は「女偵探」上下下と改題して『月月小説』に掲載される。「上下下」とは該誌第14号と第15号ともに「下」を重複させた。「上中下」を誤植したのだろう。

この「偵探」は「秘密警察 secret police」を意味する。伯爵夫人はロシア政府の秘密探偵ということになっているから題名として間違っ
てはいない。ただし以前の「我友伯爵夫人」と見比べれば「女偵探」では優雅さを失った漢訳名だ。

【月月13】倫敦市中。為虚無党員秘密巢窟。其本部在西北市上。莫斯街の某号。為党中実行委員聚会之所。每當夕陽西墮。燈火初明。所有実行委員。群来集議。我自西伯利亞逃出後。便来此地。1頁

ロンドン市中は虚無党員の秘密の巢窟である。その本部は市西北のモステン街某号にあり党中央実行委員が集合する場所である。夕陽が落ちて灯火がともるたびに実行委員全員は集まって会議を開く。私はシベリアから脱出したあとここに来た。

「莫斯街」を「モステン街」と訳したのには理由がある。松葉訳が原文の“Mostyn Road”(p.54)を「茂須店町(もすてんまち)」(75頁)としているからだ。

松葉訳にほぼ忠実だった『新新小説』第6期の漢訳に比較すれば省略が多い。本部がある家についての説明も省いている。そうはいつても『新新小説』第10期で見せた大きい変化ほどには至っていない。松葉訳寄りでの中間に位置する。

ストラトノフスキー伯爵夫人、すなわち松葉訳の「すとらと、のうすきー」だ。以前の漢訳では「水多羅(水多)」また「奴密克(奴克)」と表示していた。それで合っている。こちらの漢訳ではそれを変えて最初「沙脱」(2頁)とする。冒頭の日訳音に合致している。ところが同一ページ以降は「花脱」だ。「沙脱」は誤植なのかもしれないが「花脱」では離れる。また別の個所では「奴斯夫人」(下9頁)として出てくる。読者は前後関係で理解するだろう。しかし漢訳としては粗雑といわざるをえない。

伯爵夫人の年齢も以前の24、25歳にもどしている。

伯爵夫人と劇場で知り合うと名刺を交換した。主人公は処刑人だから偽名を使用して「姓蘇。名登。号季子」(4頁)だ。以前は「姓普。名天。号公憤」にもとづいて偽名に「普樂」(5

頁)を使用していた。こちらでも変更したことがわかる。

固有名詞を自由に変更している理由はなにか。統一感に欠けているから漢訳としては不安定に見える。

松葉『虚無党奇談』は物語としての一貫性を有する。それを基本に置くと陳景韓が名前を勝手に変えるのが不自然だ。名前に関してどうして一致させないのか。

『虚無党奇談』に収録された短篇は主人公を共有する。相互に関連して統一世界を形成している。その主人公の名前を変更することはその関連性を断ち切る。単なる短篇集として陳景韓は把握しているのではないか。そういう疑問になる。

『新新小説』から『月月小説』へと掲載誌が移動していても陳景韓が漢訳者としてしっかり把握していれば生じようがない整合性の欠落だと思う。

以上の違和感は陳景韓を翻訳家として考えると発生する。しかし陳景韓が作家だという側面に重点を移せば違って見える。その時々で自分が最適だと考えた名前の漢訳なのかもしれない。

伯爵夫人との恋に落ちた主人公はどうしても彼女を殺すことができない。虚無党実行委員会に呼び出されて叱責をうけるのだった。ここまでが陳景韓漢訳の「上」だ。原作の大筋をたどりながら細部に手を入れた漢訳になっている。

伯爵夫人を殺す決心のつかない主人公は直接会って告白した。自分は虚無党員であってあなたを殺さなければならない。伯爵夫人が言うには、夫の策略で自分は秘密探偵(密告者)にでっち上げられた、濡れ衣だと主張する。以上が編集の手違いだろうが「下」だ。「中」であるべきだった。

つづく「女偵探」は再度「下」を掲げる。いきなり伯爵夫人の死体で始まる。胸は血にまみれ顔には十文字が切り刻まれていた。

【原文】……the breast of wich was stained with blood. p.72

The fair, handsome face of the princess had been slashed with the knife in the form of a cross, and the blood gave it a terribly ghastly appearance. / The cut was the distinguishing mark which Nihilists set upon the faces of traitors! p.73

……その胸は血に染まっていた。

伯爵夫人の美しい顔はナイフで十文字に切り裂かれ、その血がひどく陰惨な印象を与えていた。/その切り傷は虚無党が裏切り者の顔につける特徴的な記号だった。

【松葉】……胸の辺りは血汐を以て染んで居る。102頁

見よ如何に其殺し方の惨酷なるぞ、夫人の美しい綺麗な顔は、小刀を以て十文字形に斬刻なまれ、今までとは打て変つて、二た目と見られぬ情ない有様であるのだ。/此十文字形の切疵は、言ふまでもなく虚無党が其密告者に対して、施す所の印であるのだ。103頁

【月月15】……胸腹間血肉狼藉。下7頁
看了他的顔。又看了看他的胸腹。只見胸口傷處。劃着一個十字形。他顔也劃了個十字形。明知這是虚無党。对着密告人行刑的記号。定是虚無党員殺死的了。下7-8頁
……胸と腹のあいだが血と肉でひどいことになっていた。

彼女の顔を見て、さらに胸腹をちょっと見たが胸の傷口には十文字が刻まれ、顔にも十文字が刻まれている。明らかに虚無党が密告者に対してほどこず記号である。きつと虚無党員が殺害したのに違いない。

伯爵夫人は胸部をナイフで刺されて死去した。顔に十文字を刻むのは虚無党の儀式的な記号だと説明がある。松葉訳が原文のほぼそのままであるのに比較すると陳景韓の小さな書き換えが

気になる。胸にも十文字を刻んだことにしたので。陳景韓は書き過ぎだとは思わないらしい。

死んだとばかり思っていた伯爵夫人は生きていた。病気で死んだ女中と入れ替わった。主人公ではない別の虚無党員がその死体をナイフで刺したということだ。顔に刻まれた十文字が人物入れ替わりの事実を察知できなくさせたという種明かしである。

物語の終わりに陳景韓が登場して解説をする。

【月15】冷曰。彼所謂伊斯夫人者。其果係偵探耶。抑果如彼所言原非偵探。而為虚無党所錯疑者。其事不結果。末由探知。下13頁

冷(陳景韓)いわく、あのストラトノウスキー(伊斯)夫人という者が果たして探偵か、あるいは彼女の言うようにもともと探偵ではなく虚無党が誤解をして疑っているのか。その事は決着しないし知ることができないのだ。

伯爵夫人の名前がここでも違っている。「沙脱」から「花脱」となり「奴斯」が使われると思えばこの「伊斯」だ。同じ名前をなぜ使おうとしないのか。不思議である。

陳景韓は解説して伯爵夫人が探偵(secret police、密告者)であるかどうかはわからないと述べる。伯爵夫人は密告者ではないと自らが断言した。その場面だけでは不十分だと陳景韓は考えたとわかる。読者の理解が行き届かないことを危惧したらしい。訳者自身が出てきて事実不明だと重ねて念押ししたかたちだ。わかっている読者は困惑したかもしれない。

ル・キュー原作は復讐譚であるが同時に冒険活劇、あるいは恋愛小説にもなっている。ここではそれらに加えて身体交換の仕掛けを小さくほどこす。そこを見れば推理小説の要素も含む。

次は「爆烈弾」上下だ。

四 「爆烈弾」上下

松葉訳「四 露国皇帝の生命」——IV. THE BURLESQUE OF DEATH(死の喜劇)である。

主人公がロシア皇帝を殺害するための時限爆弾をイギリスからサンクトペテルブルクへ送るという話だ。結果として爆弾は破裂したがロシア皇帝を殺すことはできなかった。苦心の末に失敗だから「死の喜劇」という原題になったらしい。松葉が内容に沿った「露国皇帝の生命」と日訳すれば、陳景韓は実物そのものの「爆烈弾」にした。

ロシア皇帝の秘密探偵は虚無党と激しく対立し相互に監視体制を強めていた。その秘密探偵の具体的な活動例としてバルカン半島の暗殺事件を挙げる(113頁)。陳景韓漢訳はそれを削除した(上1頁)。

虚無党の悪辣さの1例として仲間殺しをも容認したことを述べる。探偵を敵対する革命党に潜入させるために同僚の「P—といふ奴(fellow-spy, P—)」(114頁/p.81)を殺して信任を得させた。陳景韓はそこを「果然將他友人批奴殺死。投入虚無党(はたして彼の友人Pという奴を殺し虚無党に投入した)」(上2頁)とそのまま漢訳する。ただし底本にあるその後の説明部分は省いた。

このように底本の一部をいくつか省略するのは主人公の行動に焦点を当てて内容を圧縮するためだ。

原作は、つまり松葉訳も同じだが、その主人公が物語る構成を維持している。爆弾を運搬する人物として選ばれたのは入党してまもない主人公と、もうひとり俱利彌育(ぐりねういつく/Grinevitch)だ。協力者として比土朗夫(ペとろふ/Pétroff)がいる。

主人公の交替、あるいは人称の変更——一人称から三人称へ

ところがここで陳景韓は奇妙な変更をした。この「爆烈弾」において主人公を入れ替えたの

だ。第3者を設定して、入党してまもないが信用があって敵が注目していない人物、すなわち「彼都」(上3頁)である。この新しい主人公ピートは松葉訳にある「比士朗夫べとろふ」から取ったらしい。

それまでは一人称で語られていた陳景韓漢訳だ。こうして物語の根底が覆った。話し手を第3者の彼都(ピート)に引き継いだから三人称小説だ。小説の基本構造について大改造をしてしまったということになる。なぜこのような変更を行ったのか。主人公を共有しない短篇集だと陳景韓は考えていたのであれば、ありうる。

上に見る人称変更の実例を挙げよう。ロシア政府の保安課長に新しく任命されたフランス人探偵義暴(ぎぼう/Guibaud)との会話だ。変装をした者同士が爆弾を奪い合った後のこと、松葉訳の主人公(陳景韓漢訳は彼都ピート)は知らぬ顔してギボウを自宅に招いた。

【松葉】で何處迄も何喰はぬ顔で、彼をして私の下宿屋へ来て、ウキスキーでも飲むやうにと勧め込んだ、所が義暴にも何か野心があつたものと見えて、何の異議も無く私の申込に賛成の意を表した、127頁

【陳景韓】彼都便対克ト說道、相識多時。尚未我寓内去過。今日無事。可否駕臨藉談心曲。克ト欣然応諾。便道、甚好。甚好。上7頁

ピータはギボウに言った。「知り合ってから長くなるがまだ私の部屋にきてくれたことはないね。今日はなにもないから話すのはどうかな」ギボウは喜んで応じて言った。「いいね」

松葉訳が主人公ウラジーミルの視点で記述しているのは一貫している。陳景韓漢訳は別人のピートを話し手に変更しているからカッコを使用して会話として訳した。まったく第三者ピートの発言であることがわかるだろう。

主人公ピート(本来はウラジーミル)がギボウを部屋に誘ったのは薬物を飲ませて情報を探るためだ。ひとつの収穫は虚無党内にスパイがひとりいることだった。その署名は「P.P.」とだけある。そこから彼得、巴取武助(べいとる、ぱとろぶすきー/Peter Patrovski)と推測した(129頁/p.93)。

陳景韓が「這人姓巴名取」(上8頁)と漢訳したのは松葉訳の「巴取」だけを引き抜いたからだ。前半のみだから「P.P.」とは一致しない。だが陳景韓はローマ字署名を省略しているために読者にはわからない。またせつかくスパイ「巴取」を出したにもかかわらず物語最後に結びつきの伏線であることには気づかなかつた(後述)。

【松葉】翌日私は巴取武助の謀反の次第を、実行本部へ話をして、死刑の宣告は忽に其頭に下つたのであつた。131頁

【陳景韓】彼都又去赴那虚無党的実行委員会。便將巴取的事。報告了党中。上9頁

ピートは虚無党の実行委員会へおもむき、ペイトルの事を党へ報告した。

陳景韓は後半にあるペイトル死刑の宣告を漢訳しなかつた。ル・キュー原作および松葉訳には当然存在しているにもかかわらずだ。この部分を削除したから物語結末との関連を見失つた。

爆弾を運送する過程でイギリスの寒村から船を雇う。宝石を運んでいると偽つたから海賊に襲われるが切り抜ける。苦勞の末に爆弾は女性虚無党員に届けられた。その直後にロシア政府のスパイであるギボウが出現する(145頁)。陳景韓はこの部分は必要がないと考えて略した(下17頁)。

数日後、ストランド街で号外が出た。ロシア王宮で爆弾が破裂し多数の負傷者がでたが死者はいなかつたという。もうひとつの記事がセーヌ川の死体を報じた。

【原文】 In the same journal, under the heading, “A Paris Mystery,” was the report of the discovery of a body in the Seine, with the face cut in the form of a cross. / It was that of the traitor Patrovski. p.105

同誌には「パリの謎」という見出しで、セーヌ川で死体が発見され、顔が十字に切られていたという記事だった。／裏切り者のパトロヴスキーのものだった。

【松葉】 其夜再び発行された号外によつて見ると、巴里の清尼川に一の死骸が浮いて、其死骸の頬には、十文字の切傷があつたとしてある。／それは言ふまでもなく謀反人の巴取武助の死骸であつたのだ。146-147頁

主人公が実行本部に報告し「死刑の宣告」が下った結末がこれだ。事前に張られた伏線は見事に回収されている。

しかし陳景韓漢訳は違う。伏線として「巴取」をせっかく出しているにもかかわらず彼はこの最後部分を漢訳しなかった。セーヌ川に浮かんだ死体を漢訳しなかったのは翻訳家としてうかつだ。また因果関係を理解しなかったとしたら作家として不注意ではないか。

陳景韓の同様例としてモーパッサン原作を挙げておく。(法)毛白石氏著、冷血(陳景韓)訳「(戦争小説)義勇軍」(『新新小説』2号1904.11.26)だ。モオパツサン著、橋本青雨訳「義勇軍」(『太陽』10巻13号1904.10.1)を漢訳したもの。モーパッサンが考えて書いた文末のヒネリ部分を漢訳しなかった。

五 「俄国皇帝」上中編

松葉訳「五 人民を売る犬」——Ⅷ. AN IMPERIAL SUGAR PLUM (皇帝の砂糖菓子)である。

前回は爆弾を運ぶ仕事だった。今回の主人公はロシア皇帝一行が乗車した列車に自ら爆弾を仕掛ける実行者となる。

その具体的な状況を当事者である主人公(ウラジーミル)が説明する。これがル・キュー原作と松葉訳である。

陳景韓が漢訳してほぼ底本どおりになっている。ロシア国民の実状を説明している箇所から一部を引用する。

【松葉】 此の如くして国内唯一人と雖も、自由の息をば吸ふことが能ないのだ、警察は僅かの金の為めに、人の生命を売る所の忌しい犬であつて、行政は腐敗し、法律は頽廢して居る。貧乏、困窮、飢渴、これ等の恐しい物は、国内到る處に充ち満ちて、幸福をいふものは、夢にも見る事が能ぬ、これが露西亜の今日の有様である。150-151頁

警察について「人の生命を売る所の忌しい犬」というところから松葉の「人民を売る犬」という題名になった。ただし本作の攻撃対象はあくまでもロシア皇帝そのものだからやはり原題の「皇帝の砂糖菓子」がふさわしい。種を明かせば「皇帝の砂糖菓子」の中に爆弾を仕込んだからである。

【陳景韓】 因此国内人民。竟無一人。敢吐自由之氣。人人都是吞声忍氣。屈服於所有警察威權之下而已。不但加此。國中法律。既已紛亂。加以治理不善。到處土地荒蕪。工商衰竭。大半人民。終日汨沒於貧乏困窮。飢渴疾病之中。世間所謂幸福之說。我俄羅斯人。再不能夢見了。上2-3頁

このため国内の人民は、結局ひとりとして自由の息を吐かない。ひとびとは皆ぐつとこらえて泣き声を飲み込み警察の権威権力に屈服するのだった。そればかりではな

い。国中の法律はすでに退廃しており、加えて統治は腐敗し、至る所の土地は荒廃し、工業も衰退している。大半の人民は終日貧乏困窮と飢餓疾病の中に埋もれて世間という幸福というものは我がロシア人はもはや夢にも見るができない。

直訳ではないが松葉の趣旨は把握していることがわかる。

その現状を打破するために虚無党が実行することは何か。ロシア皇帝を先頭とした勢力全体を破壊排除することだ。

【松葉】今の所謂皇帝なる者を其位より逐ひ斥け、其勢力を破壊し、彼を圍繞する其腐敗せる有司、其憎むべき勸告者を塵殺にし、斯くして文明と平和と自由とを齎し来り、正直にして勤勉に、よく神を畏るゝ所の全露西亜の老若男女に向つて、幾百年来の苦みを慰めてやらうと云ふのが、虚無党の本願なのである。151頁

【陳景韓】俄国的皇帝。実係破壊俄国平和的罪魁。我們党人。立竟将他逐出本位。殺了他的勢力。四旁附和的腐敗官員。亦須将他全行殺盡。先将擾乱平和的根子絶去然後正真的平和文明幸福。或有齎来的一日。不畏死。不怕難。正直勤勉。仁愛慈祥。由我党人。救出全俄的老幼男女。数百年困窮。這真是我虚無党人的本願也。3頁

ロシアの皇帝は実のところロシアの平和を破壊する罪人の首領である。我々が黨員は彼をその位置より追い出し、その勢力を破壊し、周りを囲む腐敗官吏をすべて殺しつくさなければならない。先に平和をかき乱す根を絶やせば、その後には本当の平和文明幸福がもたらされる日があるかもしれない。死を恐れず、困難をおそれず、正直にして勤勉に、仁愛し慈悲深くして、我が黨員により全ロシアの老若男女を数百年の困

窮から救出する。これこそが我が虚無黨員の本願なのである。

「有司」は官吏のこと。陳景韓は正しく「官員」と訳している。こも同様に直訳そのものではないが松葉訳の大筋は把握していると言っている。

しかしある変更を施している。主人公の名前だ。前の「爆烈弾」では人稱を変え「彼都」と名前を与えていた。それを再度書き直す。

【松葉】我が諸君は、既に浦出見、信露好なる私、即ち我が露西亜帝国に忠実なる軍人が、(後略) 152頁

【陳景韓】我並非外人。我名胡勒。我原是個俄羅斯的忠実軍士。(後略) 上4頁

私は決して別人ではない。私は胡勒という名前だ。私はもとはロシアに忠実な軍人だった。

三人称「彼都」だったのが今度は一転して一人称「胡勒」だ。読者はその名前を見て別の虚無黨員の物語だと思うだろう。松葉訳を知っている人からすれば陳景韓漢訳は一貫していないと感じる。

なぜわざわざそう変更する必要があるのか。最初は主人公に姓名を普天、号を公憤と名乗らせていた。ならば主人公を「普天」で統一すればいいではないか。

たしかに主人公が行動するときには変名を使用した。松葉「仕事をするにはたへず変名を用ゐて居たから」(161頁)、“My real name had nothing todo with executive work. (私の本名は実行者の仕事とは関係はなかった)”(p.189)である。陳景韓はこの箇所を漢訳していない。

しかしそうだからといって主人公が物語っているのだ。話者の本名を変える必要はない。だが陳景韓はそうするつもりはなかった。

作家としての側面が露呈しているらしい。その場その場で変更する。その脈絡のなさにいささか失望する。陳景韓漢訳コレリ『新蝶夢』(1906。底本は涙香訳『白髮鬼』)では原作の早い段階で物語を勝手に打ち切っている。翻訳として奇怪な操作をやっている陳景韓だ。主人公の名前が変化するくらいで驚く方が繊細過ぎるということにもなる。

ロシア皇帝一行が列車で地方に行くことがわかった。虚無党は列車が支線を走ることを知って殺害方法をいろいろと検討した。そうして列車に爆弾を仕掛けることに決定した。選ばれた実行者は主人公である。原作は“me”(p.185)、松葉訳は「私」(157頁)そうして陳景韓漢訳は「我勒」(上7頁)だ。新しい名前前の「胡勒」から来ているのはいうまでもない。

以上が「俄国皇帝」上編。次が中編である。

主人公はサントペテルブルクの菓子製造業者(confectioner's/菓子家/食物店)のところへ行った。菓子製造業者には意味がある。砂糖菓子の中に爆弾を仕掛けたからだ。陳景韓が「食物店」としたのはその理由を理解していないのかと疑う。

そこには長く消息不明だったマーシャ(Mascha p.187/増香 159頁/真香妹 中10頁)がいて再会する。妹の名前が「真香」になっている。主人公の名前を「胡勒」に変えたのと同様に失敗だ。読者もその不可解さに首をひねるだろう。

そこに警察の手入れがあると知らされた。主人公は砂糖菓子に入ったカバンを持って窓から出ようとする。陳景韓がどのように細部を書き換えるか1例を示す。

【原文】The window was high in the wall, and I could not reach it./ “Take the bag with you.

Jump on my shoulders.”gasped Liusting his back and lowering his body. p.190

【松葉】窓は非常に高くて私の手は、迎もそこに達しなかつたのだ、すると龍須哲(りゅうすてつく)は、つと私の側に寄つて来て、「さあなた、鞆をお持になつて、私の肩にお上んなさい」と、言ひながら、自分の身を低めて肩を貸して呉れた。162-163頁

【陳景韓】我便一手搶了那皮包。便要上窗去。江吞道、且慢。且慢。這窗口甚高。你跳不上。於是左手取了椅子。一手扶着我。上了窗口。中11頁

私は急いでそのカバンを持つと窓に登ろうとした。江吞は言う。「ちょっと待った。この窓は高すぎて君は跳びつけないよ」そこで彼は片手で椅子を持ち、片手で支えてくれたので私は窓に上がった。

主人公が手助けされて窓から外に逃れるというのは違くない。しかし細部がこのように違ってしまうと翻訳ではなく翻案に近くなる。こういう調子でしかも前後を入れ替えさらに省略も行なつて陳景韓の漢訳はなされているのだ。

主人公は難を逃れ妹夫婦の家でその夜を過ごした。これで陳景韓漢訳中編が終了する。

松葉訳ではこの続きがある。秘密結社の力により主人公と妹婿のふたりはロシア皇帝一行の列車に潜り込んだ。爆弾砂糖菓子を設置して走る列車から飛び降りた。ロンドンに逃げ帰った主人公は新聞で、爆弾は破裂したものの皇帝を殺害することには失敗したと知る。

『月月小説』掲載分は未完である。読者はこの最後部分を読むことができないままで終わる。

【注記1】梁艷によって未完部分が発見された。

【注記2】を参照。

『小説時報』のばあい

陳景韓「俄国之偵探術」は『小説時報』第1期(1909)に掲載された。「各国時聞」にまとめられてその中の1篇だ。そのほかには「黒

手党」「伯爵虎化記」「吸煙会」「獵河馬談」がある。その署名は「冷」。角書を見ると小説らしくない。ニュースあるいは雑録のたぐいだと思った。

あらためて調べてみると陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民出版社2014.1)はそれらすべてを採録していない。同様の理由なのだろう。

李志梅(2005)^{*2}は「俄国之偵探術」を含めて小説に分類している。それに従い樽目録第7版(2015)から収録した。

さらに国蕊(2014)^{*3}が松葉訳と原作を指摘した。[国蕊14-14]によればル・キュー原作、松葉訳『虚無党奇談』の第四章「露国皇帝の生命」だという。そこで文章を比較対照した。残念ながら違う結果になった。正解は以下のとおり。

六 「(各国時聞) 俄国之偵探術」 冷
(陳景韓) 『小説時報』第1期 宣統元年九月初一日(1909.10.14)

松葉訳「六、皇帝の間諜」。原作は“XII. THE TZAR'S SPY (ロシア皇帝のスパイ)”

松葉訳「皇帝の間諜」は3話に分かれている。ル・キュー原作は数字だけだ。松葉は独自に章題をつけて「一 あひゞき」「二 美人の死骸」「三 不忠主義」である。陳景韓は松葉の章題を省略してこの物語全体を「俄国之偵探術」として漢訳した。主人公(普天 5頁)が復讐を成しとげる最終話である。「普天」とは陳景韓が最初に漢訳した「第一 政府……地獄」で示した主人公の名前だ。途中で何度か名前変更をした。ここにいたりようやく元にもどった。

パリのロシア秘密探偵局長マルティアノフ(Martianoff/圓手延まるてのぶ/麦推奴)と青年アンドレ(André/安度流あんどる/安度。注:伯爵の息子)が登場する。主人公がふたりを尾行して会話を盗み聞きする場面から物語は

始まる。なにやら言い争いをしている。

ロシアからの亡命者で虚無党の父を持つナタリヤ・レベデフ(Natalya Lebedeff/奈娜理礼美貞夫なたりなればてふ/奈娜児礼美貞)がいる。彼女はアンドレと会った。主人公からすればふたりの関係は一見して怪しい。なにかしら子細がありげだ。

父レベテフは爆弾所持を理由に逮捕された。娘ナタリヤは行方不明になる。後にセーヌ河に浮かぶ死体で発見された。

主人公は秘密探偵局長マルティアノフの家に家僕として入り込んだ。情報を盗み放題である。ある日、来客と主人の会話を盗み聞きして事件の真相を知ることになる。マルティアノフは局長だから虚無党についての秘密情報をすべて把握している。娘ナタリヤは亡命虚無党員である父レベデフに関する報告書(手紙)を知りたかった。そこで局長と面識のあるアンドレを通してそれを入手した。それが露見して彼女はマルティアノフ本人によって殺されたのだった。

マルティアノフ家において主人公の前任者だった虚無党員ザドレフスキー(Zadlewski/是士露好ぜどろういすきー/撲児)がやってきてマルティアノフを暗殺して逃亡した。死刑執行の実行者は彼であった。秘密探偵局長マルティアノフが殺害されたことによって主人公の復讐は終わる(三 不忠主義の212頁)。主人公が直接手を下したわけではない。最高責任者を倒すことが重要だった。

ル・キューが述べる秘密探偵局長暗殺後の経過は松葉はそのまま訳した。しかし陳景韓が書き換えた小さな箇所を示す。

主人公は仲間のザドレフスキーが訪問した事実を最後まで押し隠した。これが原文だ。

【原文】but as I kept Zadlewski's visit a secret, and could throw no light upon the mysterious crime, I was set at liberty. p.308

しかし、私はザドレフスキーの訪問を秘密にしたので、この不可解な犯罪は解明されずに私は自由の身となった。

【松葉】私はどこ迄も土露好が訪ねて来たことを秘して居たから、此不思議なる罪悪に、何の光明も与ふることが能ず、私も巧く嫌疑の目を避けることが能た。212頁

主人公は暗殺者の存在を話さなかったから事件は迷宮入りになる。陳景韓はそれを次のように変更した。

【陳景韓】到了明日。那撲兇已逃往別国。法国的官吏。便將這罪。加罪撲兇身上。再不追究了。俄国在法的虚無党人。聽了這個信悉。都暗暗地默誦。俄国自由洪福。虚無党洪福。9頁

次の日になるとあのザドレフスキーはすでに別の国に逃れていた。フランスの官吏はその罪をザドレフスキーに負わせてそれ以上追究しようとはしなかった。フランスにいるロシアの虚無党員はその知らせを聞くと、ロシア自由の大幸福、虚無党の大幸福、とみなが密かに頭の中で暗唱したのだった。

ザドレフスキーが逃げ切ったという結果は変わらない。しかし陳景韓の漢訳では主人公が仲間の名前を警察に告げたことになる。虚無党の規則からしてあり得ない。だが陳景韓はそう思わなかった。

問題はそれだけではない。陳景韓は「ロシア自由の大幸福、虚無党の大幸福」と書き加えてあたかも物語が完結したように記述した。だが松葉訳には解決部分がまだ続いている。陳景韓はそれをすべて省略したのだ。すなわち約9頁ほどの最後部分を漢訳しなかった。

そこには事件の真相が述べられている。話すのは主人公の妹マーシャ（増香）だ。秘密探偵

局長マルティアノフを暗殺したのは虚無党員ザドレフスキーではないという。別の虚無党員が実行した。しかもマーシャはあのアンドレ伯爵（実は虚無党員）と結婚したと告げる。その後、彼らはロマノフ王朝に一大打撃をあたえる虚無党に資金を提供しつづけている。そう述べて物語は終結する。

陳景韓漢訳では最後の謎解きがなされていないことになる。探偵小説でそこを削除するのは致命的な欠陥だ。清朝末期の読者は松葉訳を知らない。知らないのだから不完全燃焼で終わることもない。それが欠陥だとも思わないだろう。読者としてそれで幸せかといえ返答に窮する。だが松葉訳と陳景韓漢訳を比較対照すれば陳景韓の手抜きであることは明らかだ。

結 論

結局のところ陳景韓は松葉訳6篇をすべて漢訳した。3種類の掲載誌をへて公表時間は1904年から1909年までの5年間にわたる。息の長い連載だ。伯爵夫人については3度も漢訳し直している。それを含めてよほど気にいった松葉訳だったらしい。お気に入りならば齟齬が出ないように全体を調整すべきだ。ところが作品全体に共通して使われる名称を前後で維持することができていない。不可思議なところだ。掲載雑誌が異なるからといって人物名まで変更する必要はなかったと考える。

「俄国皇帝（五 人民を賣る犬）」は未完に終わった。漢訳していたが公表が中断したのか、残りは別の雑誌に掲載されているのか。詳細は不明だ。【注記2】梁艷論文によると「炸彈」として『旅客』2巻1期（1909.1.23）に掲載されていた。

やはり目立つのは松葉訳「六、皇帝の間諜」の最後部分を削除したことだ（漢訳は「（各国時聞）俄国之偵探術」）。実際に存在している問題解決の重要部分である。そこがないと作品の構成が崩れる。漢訳として成立しない。そこ

を注視すればどうしても不具合が生じているといわざるをえない。

「陳景韓漢訳『俠恋記』——有明山樵『伯爵と美人』」の例もある。陳景韓は有明作品を翻訳しはじめたが、途中で翻案に切り替え、最後

は創作した。

いくつかの例にすぎない。だが陳景韓は漢訳しながら作家の素顔をややもすれば露出させる。翻訳家としてはうまく機能していないように疑う。



作品対照表

LE QUEUX	松居松葉	陳景韓			
		『新新小説』	『月月小説』	『旅客』	『小説時報』
I. A CROOKED FATE,	一、恐ろしき政府	政府……地獄 3号1904.12.7			
II. ON TRACKLESS SNOW,	二、シベリアの雪	西比利亜の雪 4期1905.1.6			
III. MY FRIEND, THE PRINCESS,	三、わが友伯爵夫人	我友伯爵夫人、 6期1905.3.6 伯爵夫人(一) 10期1907.5.12	女偵探 上下下13号 1908.2.8 14号1908二月 15号1908三月		
IV. THE BURLESQUE OF DEATH,	四、露国皇帝の生命		爆烈弾 上下 16号1908四月 18号1908六月		
V. SOPHIE ZAGAROVNA'S SECRET,					
VI. BY A VANISHED HAND,					
VII. THE JUDAS KISS,					
VIII. AN IMPERIAL SUGAR PLUM,	五、人民を売る犬		俄国皇帝 上中 19号1908七月 21号1908九月	【梁艷による】 炸彈 2巻1期1909.1.23	
IX. FALSE ZERO,					
X. THE MYSTERY OF LADY GLADYS,					
XI. AN IKON OATH,					
XII. THE TZAR'S SPY,	六、皇帝の間諜				俄国之偵探術 1期1909.10.14

【参考文献】

詹宜穎「虚無党小説的跨境旅行——關於“Strange Tales of a Nihilist”英、日、中三個版本的考察」『東亜観念史集刊』第13期 2017.12 電字版。2021.7.3: 詹宜穎氏より論文ファイルをいただいた。多謝。2021.10.25追記: 訂正論文ファイルをいただいた。こちらにも感謝。

梁 艷「“佚失”的《虚無党小説》俄国皇帝》下篇——陳景韓轉訳 *Strange Tales of a Nihilist* 発表始末」『清末小説から』第145号 (2022.4.1)

【注】

1) 中村忠行「晚清に於ける虚無党小説」『天理大

学学報』第85輯 1973.3.21。142頁

- 李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』華東師範大学2005.4 2005届研究生博士学位論文
- 国蕊「陳冷血による翻譯小説の底本に関する考察」『跨境:日本語文学研究』第1号 2014.6 高麗大学校日本研究センター 電字版。略号は[国蕊14]。なお国蕊「近代翻譯文学中日本轉訳作品底本考論——以陳景韓的轉訳活動為例」(『文学評論』2019年第1期 2019.1)がある。しかし記述を変更して松葉訳『虚無党奇談』だけを示す。間違いではない。しかし個別の作品を省略したから底本の詳細が不鮮明になった。

清末小説から

- 葉 龍○林紓研究 『能仁學報』第4期 1995
- 范 苓○清末におけるジュール・ヴェルヌの受容：梁啓超訳『十五小豪傑』を中心に 『大阪大学言語文化学』第9号 2000.3.31 電字版
- 張 治○晚清科学小説鄒義：对文学作品及其思想背景与智識視野で考察 『科学文化評論』第6卷第5期 2009.10.10
- 張 璘○『文学伝統与文学翻訳的互動』鎮江・江蘇大学出版社2013.12
- 古二德 (CÉSAR GUARDE-PAZ) ○A TRANSLATOR IN THE SHADOWS OF EARLY REPUBLICAN CHINA: LIN SHU'S POSITION IN MODERN CHINESE LITERATURE AN OVERVIEW “A TRANSLATOR IN THE SHADOWS OF EARLY REPUBLICAN CHINA: LIN SHU'S POSITION IN MODERN CHINESE LITERATURE AN OVERVIES ” (“MONUMENTAL SERICA: JOURNAL OF ORIENTAL STUDIES” 63:1, JUNE 2015)
- 朱 崇志○『清末民初戲劇伝播研究』上海・復旦大学出版社有限公司2018.8
- 詹 宜穎○東亜訳者対 William Le Queux 'Recounts the mystery of a front door' 的翻譯与改造 『東亜漢学研究』第9号 2019 電字版
—— ○文本的冒険：William Le Queux Confessions of a Ladies' man 在日本与中国的翻譯 學術報告？発行日:2020-07-29 14:51:07. 未見
- 楊 焘○安徒生童話在中国的推介与翻譯：“哎呀，聽聽這小孩子 『文匯報』2019.1.18 電字版
- 李 春○『文学翻譯与文学革命——早期中国新文学作家的翻譯研究』北京・中央編訳出版社 2019.12
- 汪 耀華○『商務印書館簡史：1897-2017』上海書店出版社出版、上海人民出版社發行中心發行 2020.3
- 簡 平○安徒生的到来 『北京晚報』2020.7.13

電字版

- 甄 陶○安徒生童話的早期翻譯 ウェブサイト 「澎湃新聞」2021.3.1 電字版
- 趙 鴻飛○『抱布買絲——近代通俗小説中的上海商業文化叙事』上海科学技術文献出版社2021.9
- 匡 艷○『晚清民国時期的中日文化交流研究』長春・吉林人民出版社2021.9
- 張 潔○『清末民初的翻譯衝動与症候：精神分析學視角』南京大学出版社2021.10
- 褚 金勇○『從書籍到報刊：晚清文人的書写轉型研究』北京・中国社会科学出版社2021.12
- 邱 雪松○【書評】“版權”的名實之辨：評王飛仙《盜版商与出版人》 『中国出版史研究』2022年第1期(総第27期) 2022.1.20
- 陳 冕○【書評】權与利的糾葛：評王飛仙《盜版商与出版人》 『中国出版史研究』2022年第1期(総第27期) 2022.1.20
- 王 飛仙○《盜版商与出版人》補遺：对兩篇書評的回応 『中国出版史研究』2022年第1期(総第27期) 2022.1.20
- 馮 鶴○『20世紀中国幻想小説史論』北京・人民出版社2022.3
商務印書館編輯部編○『商務印書館一百二十五年：1897-2022——我与商務印書館』上下冊 北京・商務印書館2022.4/細目は清末小説研究会ウェブサイト
- 楊 華波○伝訳西文、教授西語：近代華人文士任廷旭 『中国出版史研究』2022年第2期(総第28期) 2022.4.20
- 崔 龍○探偵小説家程小青と民国期上海——通俗と啓蒙のはざまで 神戸大学博士論文 2015.3.1公開 2022.7.29PDF公開
- 頼 慈芸○『翻譯偵探事務所：偽訳解密！台湾戒嚴時期翻譯怪象大公開』台湾・蔚藍文化出版股份有限公司2017.1/2020.8二版二刷/細目は清末小説研究会ウェブサイト
- 李欧梵『現代性的想像——從晚清到当下』杭州市・浙江大学出版社2019.4/細目は清末小説研究会ウェブサイト